

## モンゴルの障害者とその家族の実証的研究

### À 調査報告書

#### 目次

略語一覧

はしがき

調査実施の主旨、状況、目的、調査範囲

A調査チーム構成

#### 1.調査の方法、実施

調査の方法、設定

調査データの収集、分析

#### 2.調査結果

調査対象者に関する基礎情報

調査対象世帯の状況

トルゴイト地域住民の生活、参加

#### 3.調査結果、提案

#### 参考文献、資料

付属資料 1.A 調査票

#### 略語一覧

ÒÁÁ	非政府組織
ÇÕÆÒ	ジェンダーセンター
-ÑÃ	ナショナル統計局
ÕÁÈ	障害者
ÑÕÄ	ソングノハイルハン地区
ÁÃÄ	バヤンゴル地区
ÅÁÑ	義務教育学校

アイマグ - 県

ソム - アイマグの下の行政区分

バグ - 田舎の村、ソムより規模が小さい

ゲル - 伝統的な白い天幕の住居

トゥグリグ - モンゴルの通貨 ( 1 \$ = 1165 トゥグリグ )

## はしがき

モンゴル国が市場経済への道を歩み始めて15年が経過した。本報告書は、この間に国が定めた最低生活水準を下回る多くの「貧困世帯」がどのように生み出されたのか、そしてその人々は日々どのように暮らしているのかの実態を明らかにしたものである。

私どもの調査研究のプロジェクトチームは2006年3月に、日本福祉大学COE、ジェンダーセンター、モンゴル国立教育大学ソーシャルワーク学科の3者による共同研究チームとして発足した。そしてその全体の研究テーマは「モンゴルの障害者とその家族の研究」である。それは、市場経済化にともなって、社会的弱者である障害児・者とその家族に「貧困化」の問題が最も鋭く表れているからである。しかし私たちの問題関心はそれだけではない。市場経済化にともなって生活の困窮化に陥りながらも、同時に住民がみずから助け合い、みずからの地域を改善し、場合によっては行政機関にも働きかけるといふ、新たな活動が始まっていることにも注目してきた。

こうした観点から、私どもが注目したのが、ソングノハイルハン区である。この区はよく知られているように、市内の貧困層だけでなく、なによりも市外の他の県からの貧困層が多く流入してきた地域であり、そこには障害者家族もかなり含まれていることが明らかであった。そしてこの区のなかでも第3ホロー（人口1万1500人、2130戸）は、最近3～4年間に住民が自分たちの力で地域社会の改善に立ち上がっているホローである。

こうして私ども調査研究チームは、ソングノハイルハン区第3ホローに調査の対象を定め、次の3種の調査を実施することとした。

- (1) A調査 = 第3ホロー住民から抽出した約300世帯の住民生活実態調査。
- (2) B調査 = この300世帯のうち障害児・者をかかえた約50世帯の生活実態調査。
- (3) C調査 = 障害児・者を抱えながら住民活動に積極的に地域の改善運動に関わっている世帯。

この3種の調査において、A調査は第3ホローの実情に最も詳しいジェンダーセンターが担当した。そして調査結果と分析と執筆も同センターによるものである。

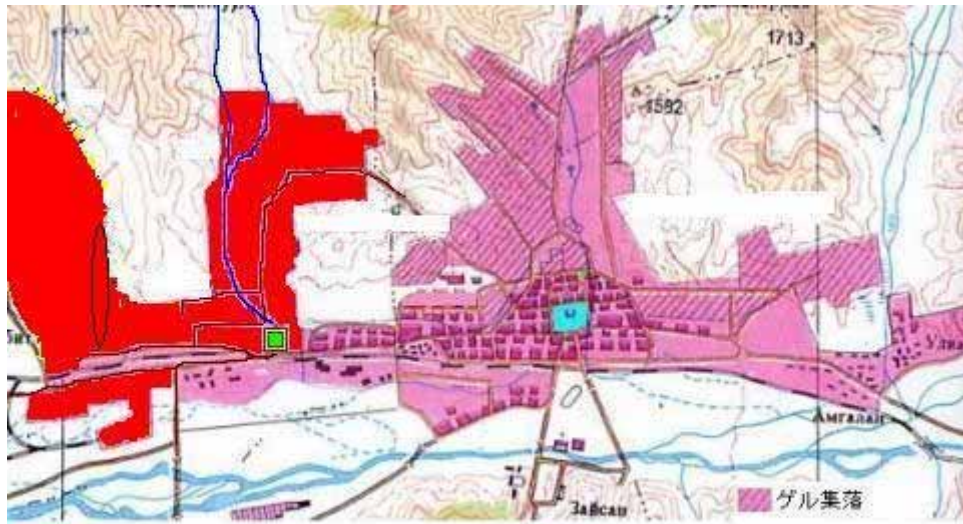
A調査の実施にあたっては、ホロー長ならびに全10ヘセクのヘセク長の方々に調査対象世帯に訪問していただいた。ヘセク長の方々に深く感謝したい。また、この調査に時間をとって快く応じていただいた住民の方々に厚く御礼をもうしあげたい。

2007年3月

日本福祉大学教授 長沢孝司  
ジェンダーセンター代表 アムラガン  
モンゴル国立教育大学ソーシャルワーク学科長  
ウルジトンガラク

本報告書日本語版全訳 A.Delgermaa (東京大学大学院人文社会系研究科 院生)

2006年調査対象地域 ウランバートル市ソングノハイルハン区第3ホロー

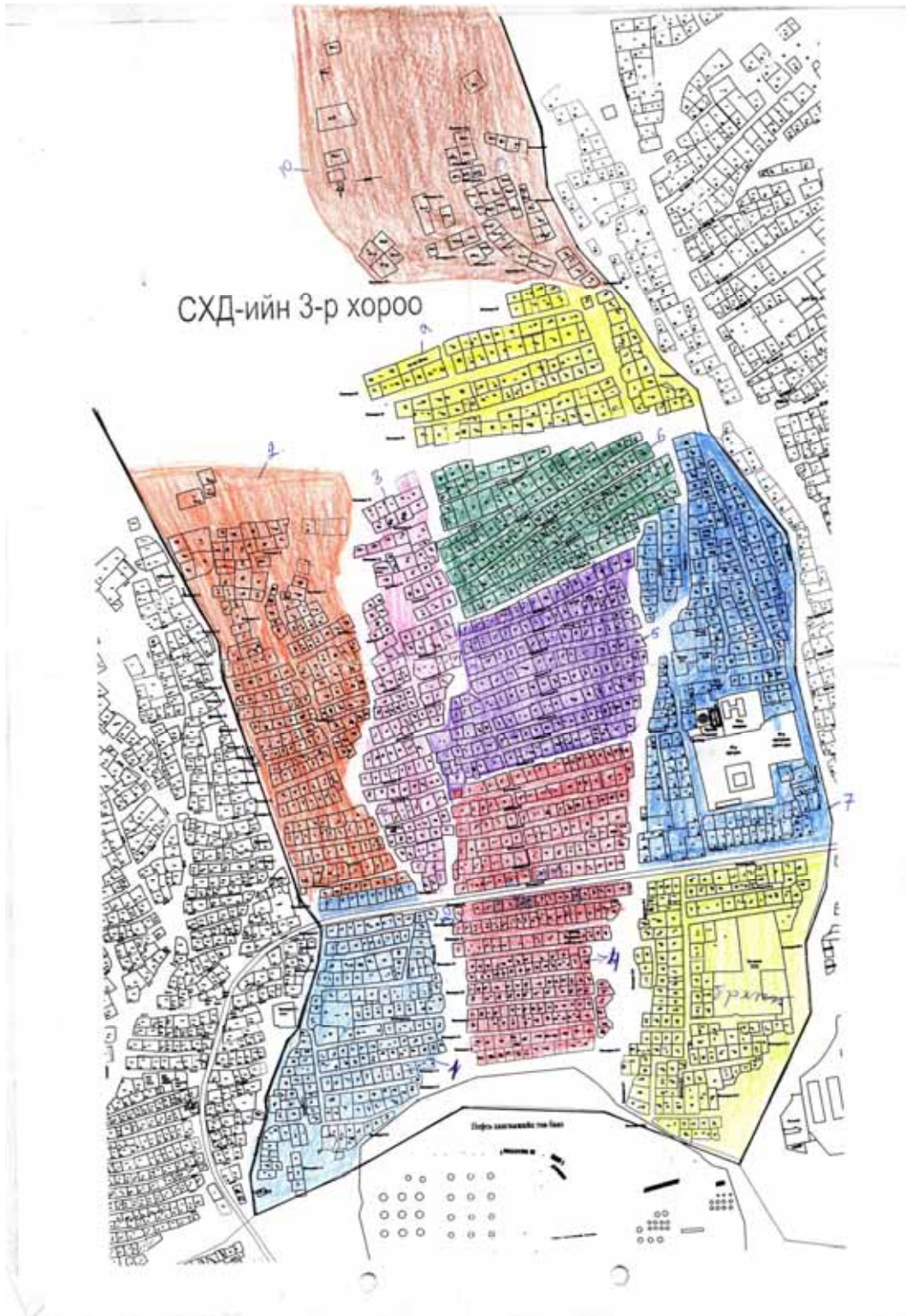


■ ソングノハイルハン区

■ スポーツトル広場

国会議事堂前広場

ソングノハイルハン区第3ホロー全図と調査対象区域(2、9、10ヘセグ)



水口一役場

調査実施の主旨、状況、目的、調査範囲

本調査報告書は、COE (21<sup>st</sup> Century COE Program)の調査研究の成果の一環である。日本福祉大学は、2003年から5ヵ年計画で東アジア（特に中国と韓国）との連携によってプロジェクト研究を発足させた。この調査研究は日本の文部科学省の承認のもとに、その援助金によって行われている。この事業は具体的には日本と東アジア諸国との共同の調査研究を推進する、それらの調査研究の蓄積を通して「福祉社会開発学」という新しい科学を創造する、こうした研究を通して福祉研究者を養成し、必要に応じて日本での研修も行う、というものである。

島崎、長沢、今岡は以前からモンゴル国の研究を推進してきたこともあり、この主旨に賛同して、このプロジェクトの一環としてモンゴル研究グループを発足させた。

本調査は、日本福祉大学、モンゴル教育大学ソーシャルワーク学科、ジェンダーセンターの3者による共同チームにより実施した。

調査チームは今回、ウランバートル市ソングノハイルハン区の第3ホロー長の積極的協力を得て、第3ホロー住民の生活状況を明らかにするために調査を実施することとなった。第3ホローは、障害児・者が多く、また地方から移住してきた貧困家庭の数が多いというきわだった特徴をもつ地域である。しかも、このホロー住民は生活の困窮に陥りながらも、地域の変革のために住民運動<sup>1</sup>を形成し、協力し合っていることに我々は大きな関心を寄せている。それは「福祉社会開発」のあり方を示す重要な1モデルと位置づけられよう。

こうして「障害児者とその家族に関する実証的研究」をテーマとするわれわれは、ソングノハイルハン区第3ホローにおいてA,B,Cの3種の住民調査を行うこととした。本書はこうしたA調査結果に関する報告書である。

#### A調査の主な目的：

市場経済化に伴う地域住民の貧困化を明らかにし、そのメカニズムを追究する。

市場経済移行に伴い、モンゴルでは貧困化が進み、社会問題となっている。1990年以前、モンゴルは計画的経済中心の社会主義国であったが、社会福祉政策は人々の平等な生活水準を目標にしていたために貧困問題は存在しなかった。市場経済導入と共に旧ソ連からの援助が中止され、多数の国営企業、工場が倒産に追い込まれ、失業率が急増した。これに伴い、経済状況が悪化し、福祉対策の範囲が縮小し、大家族世帯、障害者を抱える家族、高齢者の生活水準が急激に低下して来た。社会主義時代は、農牧業に従事していた地方住民が互いに協力し、リスク、費用を協同で負担する伝統的な慣習が無くなり、田舎の遊牧民が自然災害、旱魃、ゾドに単独で対応しきれなくなり、その結果、貧困化が進んでいる。

90年代以降、モンゴルでは全国規模の生活水準に関する調査が3つ実施されている。調査結果によると、貧困者の生活水準がますます悪化し、貧困者数が急増している。こうした調査結果を見てみると、貧困水準が1995年に36.3%、1998年に35.6%、2002年に36.1%に達している。こうした貧困の特徴は、季節に左右されていることである。市場経済移行前期には、貧困は収入によるものだったが、近年、貧困は個人の能力低下によるものとなっていると研究者が指摘している。

---

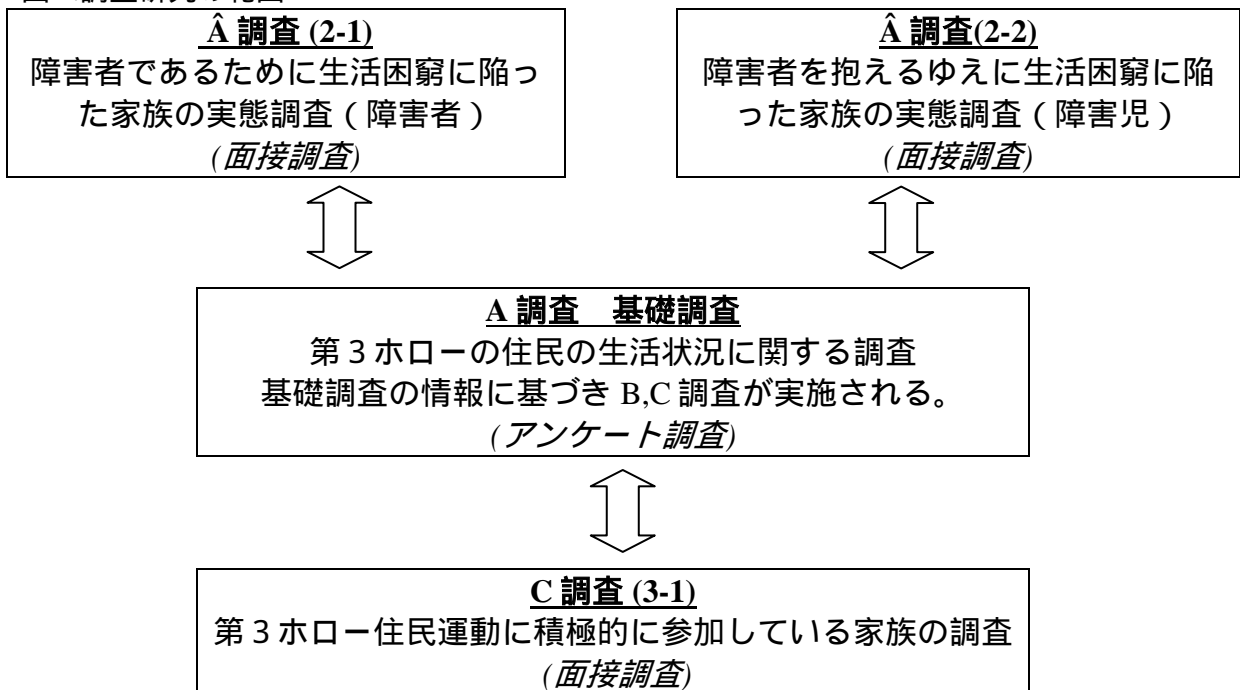
<sup>1</sup>第3ホロー住民が地域の発達のために協力し合い、住民運動を形成し、注目をされている。彼らは住民のフォーラムを組織し、ホローの発展に住民の参加を取り入れ、「ホロー発展モデル」を作成したうえで、社会的弱者を減少させることに住民の参加、積極性、率先が重要でありことを再認識し、住民の参加を基礎にした生活知恵、経験を普及し始めている。

ソングノハイルハン地区はウランバートル市<sup>2</sup>の東に位置し、21 ホローからなる。第3ホローはトルゴイトホローロールのバガナランという場所に位置する。2007年現在、第3ホロー住民数は11295人。そのうち、約500人は一時住居者である。ホローの統計資料によると、ホロー世帯数は2219世帯。ホローの全世帯の約60%が貧困世帯である。ホロー面積は115.7ha、120のグダムジ(通り)、1650のハシャーがある。ホローが設立されてから50年経過している。

本調査により、市場経済下の貧困化とその要因を、広範な角度から特定の行政単位において詳しく取り上げたことは地域にとって重要な意義があると私どもは考えている。

調査準備段階において、上記の3調査チームは、調査をどのように組織し、実施するかを議論したうえで、調査範囲を確定した。調査研究は図1に示したように3つの調査から構成されている。この3つの調査は互いに密接に関連している。

図1.調査研究の範囲



### A調査チームメンバー

- 日本福祉大学教授 長沢孝司 (家族研究)
- 日本福祉大学元教授 島崎美代子 (地域研究)
- 大阪外語大学助教授 今岡良子 (モンゴル研究者)
- モンゴル国立教育大学ソーシャルワーク学科 学科長 Kh,Ulziitungalag
- ジェンダーセンター 所長 T.Amgalan
- 第3ホロー 議会会長 T.Dandin
- 第3ホローホロー長 G.Tserendulam
- 東京大学大学院人文社会系研究科院生 A.Delgermaa

<sup>2</sup> ウランバートル市は7つの地区、121ホローからなる。

À 調査実施メンバー:調査チームリーダー T.Amgalan。調査実施メンバー:

- |                     |                    |
|---------------------|--------------------|
| 1. N.Bayasgalan     | ジェンダーセンタープログラム調整員  |
| 2. B.Onon           | ジェンダーセンター情報担当者     |
| 3. B.Gereltuya      | ジェンダーセンター プログラム調整員 |
| 4. T.Battumur       | ホロー住民運動会員          |
| 5. Ya.Tsetsegee     | ホロー住民運動会員          |
| 6. D.Soyolmaa       | 第2ヘセグリーダー          |
| 7. D.Ulzijargal     | 第10ヘセグリーダー         |
| 8. T.Narantsetseg   | 第10ヘセグリーダー         |
| 9. D.Luvsannyanrag  | 第10ヘセグ・グダムジリーダー    |
| 10. Ts.Tserendolgor | 第2ヘセグ・グダムジリーダー     |

**1 .A 調査の方法と実施****A 調査方法、設定**

本調査は、 アンケート調査および面接調査、 資料による分析、まとめ、比較などのいくつかの調査方法を用いて行われた。

調査対象地は、ウランバートル市ソングノハイルハン地区の第3ホローの3つのヘセグ(2,9,10)である。調査対象者の設定は、有意抽出法(Purposive)で行われた。

**A 調査のデータ収集、分析**

調査データをアンケートと面接調査方法を用いて、収集した。アンケート調査は第3ホロー長およびCOE (21<sup>st</sup> Century COE Program)プログラム共同調査チームの協力を得て、実施された。

アンケート調査は2006年7月29日から8月4日の間に行われ、調査データ収集は第3ホロー住民運動会員、ヘセグリーダー、ジェンダーセンター職員の11人の共同チームが実施した。調査票は調査チームが事前に作成し、プリテストを行ったうえで最終案が確定された。

写真1 Zurag 1

A 調査実施チームの研修集会

A 調査データは、SPSS - 12 プログラムを使用し、分析された。収集データ分析の際に、グループ化、比較などの方法を使用し、結果をまとめる際に、表、図、計算方法を使用した。調査チームは特定の地域レベルでデータを収集し、調査報告書は A 調査リーダーがまとめ、全員で検討したうえで作成した。

今後、このような調査を実施する際に、地域の特徴、インフラ整備との関係で生じる問題をよく検討する必要があることがデータ収集時に観察された。調査実施時の問題点、教訓は調査チームにとって貴重な体験となった。



## 2.A 調査結果

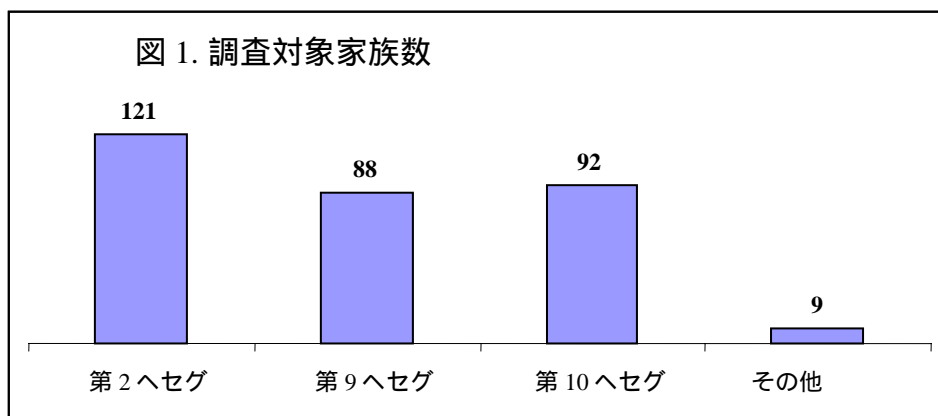
### 調査対象者に関する基礎情報

調査対象家族数：第3ホローのうちの3つのヘセグである。3ヘセグは合計310家族、対象人口は2,910人である。調査対象地である第3ホローにはヘセグが10ある。この中から3つのヘセグを選定し、調査対象にした。この3つのヘセグは他のヘセグに比べて移住者の数が多いため人口が急増していること、および貧困および極貧困世帯が多いという特徴を持っている。ホロー役所が独自で実施した統計調査結果、この3つのヘセグには障害者の数が比較的に多いなどの理由を考慮し、調査対象に設定した。

調査対象家族はヘセグ別に見てみると、第2ヘセグ121家族、第9ヘセグ88家族、第10ヘセグ92家族、その他9家族となる(表1.)。

表1.調査対象家族数、位置

ヘセグ	調査対象家族数	割合
第2ヘセグ	121	39.0
第9ヘセグ	88	28.4
第10ヘセグ	92	29.7
その他	9	2.9
合計	310	100.0



調査地対象地はウランバートル市郊外のゲル地区に位置する。このような世帯<sup>3</sup>および家族はゲルあるいはバイシン（木造の小さな家）に住んでいて、外側はハシャ（柵）で囲っている。一つのハシャーにいくつかのゲル、バイシンがあるがこれは一つのハシャーにいくつかの世帯が一緒に居住していることを意味する。

調査結果によると、ひとつのハシャーに1~4家族が居住し、1世帯に2家族以上が協同で生活している場合が多い(図2)

調査対象310家族中、5家族がハシャーの無いところでゲルを建て、生活している。

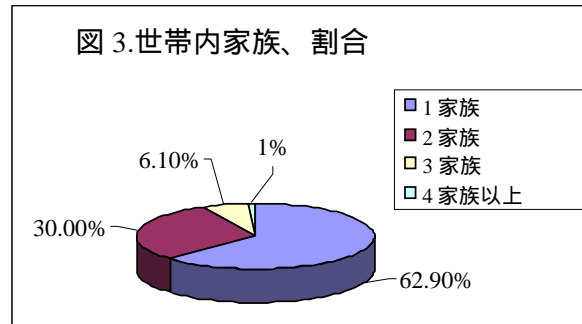
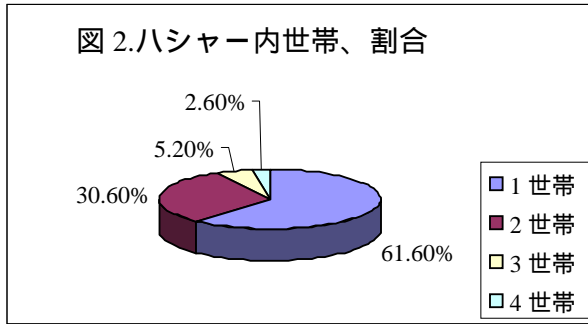
<sup>3</sup> 同じ家に住み、共同の予算を有し、食料品、生活用品を協同で供給している人々を世帯という。世帯構成員は互いに血縁関係、あるいは無血縁関係にあっても良い(モンゴル国立統計局、2000年度人口、住居に関する全国調査の定義より、2000年)。

表 2.ハシャー内の世帯数および 1 世帯中の家族数

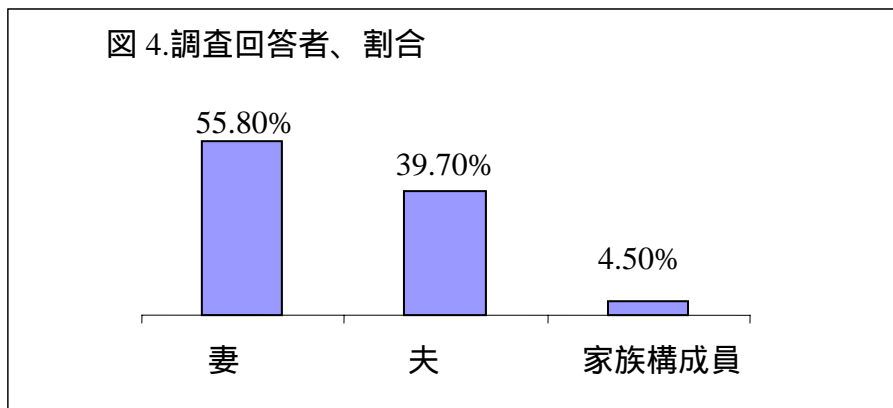
ハシャー内の世帯数 および 1 世帯中の家族 数	ハシャー内世帯数		世帯内家族数	
	合計	割合	合計	割合
1	191	61.6	195	62.9
2	95	30.7	93	30.0
3	16	5.2	19	6.1
4 以上	3	1.0	3	1.0
ハシャー無し	5	1.5	-	-
合計	310	100.0	310	100.0

図 2.ハシャー内世帯、割合

図 3.世帯内家族、割合



調査対象 310 家族のうち、アンケート回答者は 55.8%が妻が、39.7%が夫、4.5%がその他の家族員であった(図 4)。



一番若い調査回答者は 21 歳、一番年上は 86 歳、全体対象者の 58%が 31 - 50 歳であった(表 3)。この主たる回答者を調査対象者とした。

表 3.調査対象者の年齢

年齢	調査対象者の年齢	
	数	割合
21-30 歳	41	13.23
30-40 歳	91	29.35

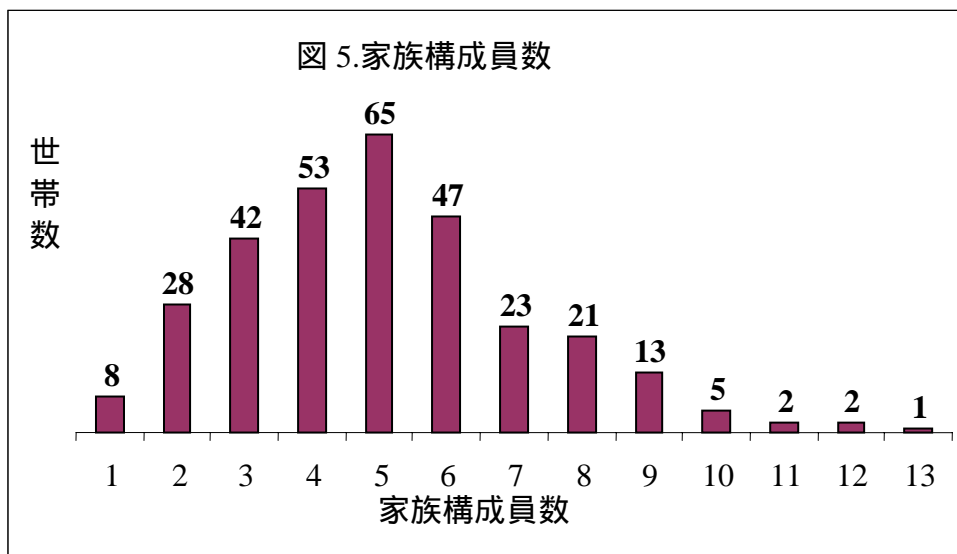
40-50 歳	98	31.61
50-60 歳	38	12.26
60-70 歳	29	9.35
70-80 歳	12	3.9
80 歳以上	1	0.32
合計	310	100.0

## 調査対象世帯の状況

### 家族構成について

近年のモンゴルで実施されてきた多数の調査研究において、社会体制移行期について分析する際に、家族および家族構成員の関係の変動、彼らをめぐる諸問題をあまり注目してきていないことを指摘しておきたい。社会制度、システム大きな変動は、家族内の関係、形態を大きく変動させることは言うまでもない。昔からモンゴルは家族の構成、家族員数、家族内役割分担、伝統的暮らし方の維持、伝承に関して歴史的な特徴をもっていた。しかし、残念ながら市場経済化後、この特徴が現在失われつつあり、家族内関係、さらに経済能力が大きく変動してきている。我々が直面している諸問題 貧困化、失業率、生活能力の喪失は、上記の問題と直接的に関連していると言えるのではないだろうか。

世帯、家族、住民の貧困の要因を明確にするうえで家族構成は重要なポイントの一つである。この意味で、我々は調査対象者の家族状況を注目し、調査した。全調査対象家族の21%は家族構成員が5人、17%が4人、15%が6人、13.5%が3人であった。平均家族構成員数は4.5人である(図5)。



家族が、誰と生活を共にしているかという情報は世帯の生活水準、家族内関係と因果関係にある。一般的にモンゴルの家族は核家族の形態をとる。しかし調査対象家族は拡大家族の形態をとっている場合が多い。ここで拡大家族というのはいくつかの家族が一緒に生活しているという意味である。例えば、夫婦とその子どもに加え、子ども夫婦(婿、嫁)孫、あるいは親、兄弟、彼らの子ども、親戚と一緒に一つのゲルに生活している。表5から調査対象者が誰と一緒に同居しているかを見ることができる。

調査結果によると、夫婦のほとんどが自分たちの子ども(息子、娘)と同居している、または子ども夫婦と一緒に生活している。若い子ども夫婦はどちらかの比較的に生活に余裕

を持っている親と同居している。これは単にモンゴルの家族の伝統的な慣習ではなく、経済的能力によるものである。

現在、我々が直面している貧困、住居供給不足は若い夫婦の親から独立して生活できるかどうかを確定付け、こうして拡大家族で同居することが家族内不調和の原因となって、生活困難が生じているといえる。

表4. 回答者の同居状況(頻度)

家族構成員	頻度		
	妻	夫	その他
息子、娘	162	111	7
自分の親	15	5	8
兄、姉、妹あるいは弟	12	4	10
義理の親(姑)	1	8	0
婿、嫁	16	14	0
祖父、祖母	1	0	0
孫	41	26	2
その他親族	20	12	4

子どもが独立して生活している世帯が35世帯あった。調査結果によると、35世帯の44人の子どもが親から独立して生活している。

表5. 親と離れて生活している子ども(数)

質問の選択肢	回答者			合計	
	妻	夫	その他	人数	割合
いる	17	16	2	35	11.3
いない	156	107	12	275	88.7
合計	173	123	14	310	100.0

表6. 子どもが親と離れて生活している家族の子どもの数

子どもの数	回答者			合計	
	妻	夫	その他	人数	割合
1人	13	13	1	27	77.1
2人	3	3	1	7	20.0
3人	1	0	0	1	2.9
合計	17	16	2	35	100.0

家族と離れて生活している子どもは祖父母と同居しているか、刑務所、あるいは出稼ぎに海外に行っている。

**事例** 47歳、シングルマザー。子ども3人。子どものうち一人がセレンゲアイマグツンヘルへ石炭とりに行っている(A-3-9-156)

田舎にいる子どもたちはアルハンガイに5人、バヤンホンゴルに2人、ブルガンに1人、スヘバートルに1人、ゴビアルタイに2人、トヴ、ウランバートル市ソングノハイルハン地区に7人、バヤンゴル地区に2人それぞれ生活している。

障害者<sup>4</sup>を抱える家族は調査対象家族の44.2%（障害者 - 大人）、16.5%（障害児）である。また少数ながら家族に2人以上の障害者がいることも明らかになった。

表 7.障害児を持つ家族数

回答の選択肢	障害者がいるかどうか		障害児がいるかどうか	
	人数	割合	人数	割合
はい	137	44.2	51	16.5
いいえ	173	55.8	259	83.5
合計	310	100.0	310	100.0

### モンゴルにおける障害者問題

モンゴル国において、障害者は社会的弱者<sup>5</sup>とみなされ、「障害者保護法」が存在する国の一つである。昨年、政府が「障害者支援ナショナルプログラム」を改正したのは、障害者問題の総合的な解決の模索の一つといえる。このプログラムは、障害者に優しい環境作りによって彼らの社会生活への積極的な参加を促進し、支援することを目的としており、それ以前の1998年～2005年に実施された障害者の保護、生活状況を優先した「障害者の生活状況改善ナショナルプログラム」と異なってより積極的な性格をもっている。

現在、モンゴル国の公的統計資料によると、障害者数は69千人<sup>6</sup>に達し、そのうち55.2%が男性、44.8%が女性である。障害者の35.5%が先天性、64.5%が後天性の障害者である。さらにそのうち、40千人の障害児が登録されていて、61.2%が義務教育を受けられないまま、31%が何とかかろうじて学校教育を受けている。障害児のうち、わずか2000人が養護学校に通い、ナショナルリハビリセンターのサービスを受けているにすぎない。

障害者、障害児が置かれている状況は決して良いものではないことが上記のデータから読み取れる。そして、後天的に障害者となる比率の高さは、住民に何らかの事故から身を守る習慣、労働保護、適切な健康的な生活スタイルを教える必要性が生じていることを示している。

社会全体で障害者を精神的に理解、尊敬し、彼らを支援、支持する意識変化が問われているといえる<sup>7</sup>。

<sup>4</sup> 2005年に制定された「障害者保護法」の3.1条に「先天的あるいは遺伝子的障害、または、事故による精神障害、能力喪失に陥った、身体的障害により労働能力を失い、自立して生活ができなくなった人を障害者とみなす」と定義されている。

<sup>5</sup> 社会的弱者という概念は、収入がない、貧困であるというよりは範囲が広く、知的、精神的能力が貧困化した、何らかの圧力、差別を受けやすい人々を含めると定義されている。

<sup>6</sup> 障害者協会の統計によると、モンゴルには140千人の障害者がいると報告されている。これは全人口の約10%にあたる。そのうち、約2000人が仕事に従事している。そして、彼らの約88%が貧困状態に置かれている。

<sup>7</sup> 1999年に保健医療省の依頼で実施されたモンゴル国立大学社会学部が実施した「障害者の社会的需要」調査、2005年イタリアのNGOAIPOの支援を受け実施された「障害者の法的環境整備」プロジェクトのアンケート調査など

2006年12月1日にウランバートル市にて開催された「障害者の人権問題」全国第1回目のフォーラムにおいて、犯罪率の増大、無計画的な建設ラッシュ、環境汚染、食料不足、道路の不整備などが障害者の生活に悪影響を与えていることが大きく議論された。

視覚障害者用の道路が無い、あってもマンホールや電信柱がたてられていることが指摘された。車椅子用の段差のない階段が無いために、階段を上がったり、下がったりすることが困難で常に抱き上げる人が必要になること、ウランバートル市の広場がつるつるしているので杖をついて歩くことが困難であると参加者が指摘した。

## 写真2 Zurag2 調査実施の様子

国立福祉および保険基金から88千人の障害者が障害者年金を受けているが、社会福祉対象者となっていない障害者が多数存在<sup>8</sup>している。法律によって保障されている障害者年金を受けられないことは障害者家族の重荷となり、さらに貧困、極貧困家庭の生活を困窮させている。

障害児を持つ親は仕事に従事し、生活を改善させるチャンスはほとんどないといってよい。その理由は、多くの家族が家で障害児を介護していることによるものである。

最近、障害児を一般の学校に健常な子どもたちと一緒に受け入れる動きはあるが、学校の整備、教員の能力不足、社会意識によって実際に浸透していない。多くの学校が障害児を受け入れることを拒んでいる。全国的に脳性麻痺の子どもを受け入れるたった一つの第10クリニック保育園が存在している。全国的に37千人の障害児が手当金を受けている。

近年、障害者の年齢が低下してきているにもかかわらず、問題の原点に注目を向けていないために状況が悪化してきている。一般に、国際的には、社会的適応能力の喪失の主な原因は身体的障害ではなく、社会参加の過程で生じる環境の障害と見ている。モンゴルの場合も例外ではない。

障害者を抱える家族は一般の家庭より2倍ぐらい負担がかかるので生活困窮に陥りやすい。

## 生活史

A調査対象者の:

- 8.4% (26人) ウランバートル市中心地区に
- 19.4% (60人) ウランバートル市郊外地区に
- 72.2% (224人) ウランバートル以外のアイマグ(県)出身者である。

ほとんどの調査対象者が地方出身者である。地方出身者のほとんどがザブハン、ゴビアルタイ、トヴ、アルハンガイ、ウブスハンガイ、バヤンホンゴルの出身者である。また彼らの60%がソム(郡=遊牧地域)の出身者である。

<sup>8</sup>さらに、2004年に実施された全国障害者登録、調査の結果、全障害者の11.6%(8000人)が病院、労働認定委員会にて障害認定を受けていないことが明らかになった。また、22.6%が障害者手当を受けており、77.4%(2057人)がこうした手当、サービスを受けていないことが判明した。

生活状況を見てみると、ウランバートル市中心地に居住している人々の生活が、郊外のゲル地区の人々の生活水準より上である。市場経済移行当時において、ほとんどの家庭が生活困窮に陥った。ただし、どのような社会変動、改革であれ上流階級の人々にはより上昇移動のチャンスを与えている。これの例として、調査対象貧困家族の少数がウランバートル市中心地区出身者であることを取り上げることができよう。彼らは、社会主義時代にウランバートル市郊外地区に生まれ育ちながら、市場経済移行期になって生活が貧困化し、何とか生活をつなぎ生きている人々である。

彼らの生活は社会主義時代も決して裕福ではなかった。

表8.回答者の出身地

回答の選択肢	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
ウランバートル市中心地区出身者	10	12	4	26	8.4
ウランバートル市郊外地区出身者	35	21	4	60	19.4
田舎、地方生まれ	128	90	6	224	72.2
合計	173	123	14	310	100.0

表9. 田舎、地方出身地(アイマグ別)

アイマグ	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
ザブハン	20	17	0	37	16.5
ゴビアルタイ	15	9	1	25	11.2
トヴ	13	10	1	24	10.7
アルハンガイ	19	10	0	29	11.8
ウブルハンガイ	11	8	1	20	8.9
バヤンホンゴル	10	7	1	18	8.0
ホヴド	9	2	0	11	4.9
ヘンテイー	3	1	0	4	1.8
その他	28	26	2	56	25.0
合計	128	90	6	224	100.0

表10.田舎、地方出身者（出身地別）

出身地	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
アイマグセンター	19	11	0	30	13.3
ソムセンター	85	63	4	152	67.9
地方、田舎	24	16	2	42	18.8
合計	128	90	6	224	100.0

表11.回答者の配偶者の出身地

回答の選択肢	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
ウランバートル市中心地区出身者	11	10	0	21	10.1
ウランバートル市郊外地区出身者	20	25	1	46	22.3
田舎、地方生まれ	62	77	1	140	67.6
合計	93	112	2	207	100.0

表 12.回答者の配偶者の出身アイマグ

アイマグ	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
ザブハン	7	17	0	24	17.1
ゴビアルタイ	6	6	1	13	9.2
トヴ	5	9	0	14	10.0
アルハンガイ	10	7	0	17	12.1
ウブルハンガイ	3	8	0	11	8.0
バヤンホンゴル	4	4	0	8	5.7
ホヴド	6	1	0	7	5.0
ヘンテイー	0	4	0	4	2.9
その他	21	21	0	42	30.0
合計	62	77	1	140	100.0

表 13.回答者の配偶者の出身地

アイマグ	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
アイマグ中心地	8	9	0	17	12.1
ソム中心地	41	57	1	99	70.7
田舎	13	11	0	24	17.2
合計	62	77	1	140	100.0

調査対象者のほとんどが地方、田舎出身者である。彼らの親、兄弟、親戚が現在ウランバートル市に住んでいるかどうか、互いに助け合っているかを聞いたが、その答えは下記の通りである。

- 37.4%がみんなウランバートルに住んでいる。
- 37.4%が兄弟は住んでいるが、親は住んでいない。
- 19.4%が親も兄弟も住んでいない。
- 5.8%親が住んでいるが、兄弟は住んでいない。調査対象者の73.8%が親や兄弟の支援、援助はほとんどないと答えている。

表 14.回答者の親、兄弟の居住地



選択肢	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
みんなウランバートルに住んでいる	62	46	8	116	37.4
親が住んでいるが、兄弟は住んでいない	11	6	1	18	5.8
兄弟は住んでいるが、親は住んでいない	67	44	5	116	37.4
親も兄弟も住んでいない	33	27	0	60	19.4
合計	173	123	14	310	100.0

表 15.親、兄弟からの支援

選択肢	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
援助はない	125	94	10	229	73.8
親に助けられている	8	7	1	16	5.2
兄弟に助けられている	27	20	2	49	15.8
みんな互いに助け合っている	13	2	1	16	5.2
合計	173	123	14	310	100.0

調査対象者の9.4%(29人)が第3ホローに生まれ育っている。地方から第3ホローへ移住した人は45.8%(142人)、44.8%(139人)がウランバートル市の他の地区から移り住んでいる(表16)。

表 16、第3ホロー居住状況

選択肢	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
生まれた時から	20	7	2	29	9.4
ウランバートル市の他の地区から移り住んだ	66	64	9	139	44.8
ウランバートル以外のところから移り住んだ	87	52	3	142	45.8
合計	173	123	14	310	100.0

第3ホローへ移住した人に「何年に第3ホローへ移り住んだか」を聞いたところ、一番早い人は1944年からであった。移住者の19%が社会主義までの1990年以前に移住しているが、約50%が2000年以降移住してきている。市場経済移行に伴い国内移動が急増していることは、経済的な要因によるものと見てよい。移行期の困難を乗り越える一つ的手段として首都への移住が考えられる。移住してきた主な原因は、仕事に就くために、親、兄弟、親戚を頼りにしてきた、土地所有のために、が最も多い。

図 6.移住してきた年代

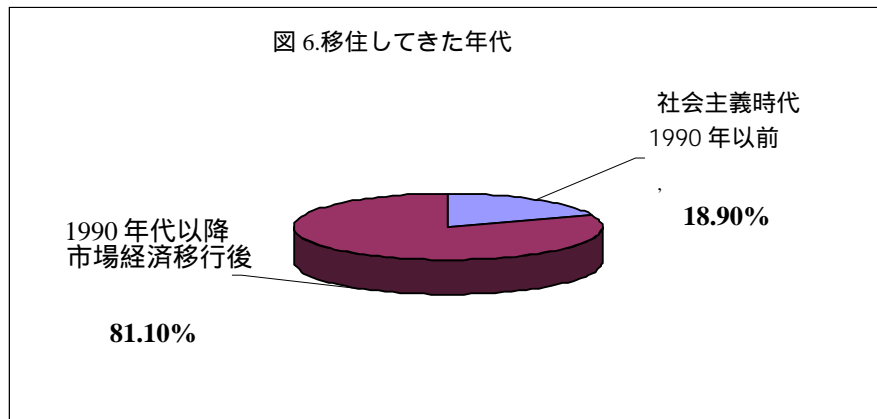


表 17、第 3 ホローに移住してきた年代

年代	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
1970以前	9	6	0	15	5.3
1970-1980年	7	6	1	14	5.0
1980-1990年	15	7	2	24	8.6
1990-2000年	46	38	3	87	31.0
2000年以降	76	59	6	141	50.1
合計	153	116	12	281	100.0

調査対象者の1.4%が学校に入る前の幼児時代に、6.1%が学校に入ってから、7%が乳児のときに第3ホローに移住してきている。

表 18、移住してきた年齢

年齢	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
8歳以下	4	0	0	4	1.4
8-18歳	11	3	3	17	6.1
18-30歳	41	29	6	76	27.1
30-40歳	49	35	1	85	30.2
40-50歳	28	30	0	54	20.6
50-60歳	9	13	0	22	7.9
60-70歳	8	5	2	15	5.3
70歳以上	3	1	0	4	1.4
合計	153	116	12	281	100.0

移住してきた原因：

- 生活を良くするために仕事を求めて
- 親、兄弟、親戚を頼って
- 土地所有のために、親の介護
- 家畜を自然災害でなくし
- 治療のために
- 子どもの教育のために

- 洪水の災害を受けて、土地の立ち退き、住む場所を変えて
- マンションを借金の取立てに取られ、お金が必要になりマンションを手放した
- 結婚して

表 19、移住原因

原因	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
生活を良くするため仕事を求めて	26	34	2	62	22.0
家畜を自然災害でなくして	9	9	1	19	6.8
子どもの教育のため	10	7	0	17	6.1
治療のため	12	7	0	19	6.8
親、兄弟、親戚を頼って	38	15	2	55	19.6
土地所有のために、親の介護	30	23	1	54	19.2
マンションを借金の取立てに取られ、 お金が必要になりマンションを手放した	3	10	1	14	4.9
洪水の災害を受けて、土地の立ち退き により住む場所を変えた	9	4	3	16	5.7
結婚して	5	1	0	7	2.5
その他	11	5	2	18	6.4
合計	153	116	12	281	100.0

近年、モンゴルでは地方から都心部、特にウランバートル市へ国内移動が急増している。地方の多くの家族、個人が教育のために、収入向上のために仕事を求めて、生活を立て直す最後の望みを胸に地方を離れ、ウランバートルへ移住してきている。

さらに、海外に出稼ぎに契約労働者としていくことが増えている（主として韓国）。

統計データによると、ウランバートルの人口の3分の1が移住者であるという<sup>9</sup>。ウランバートル郊外のゲル地区の急激な人口増大が市の社会、経済、行政事業に大きな負担を生じさせ、貧困拡大につながっていると専門家は見ている<sup>10</sup>。現在の国内移動問題が最もはっきりと表れているところはまさにウランバートル市郊外のゲル地区である。

人口移動が、地方で自由に移動しながら生活を営む伝統的な生活スタイルにも大きな影響を与えている。そして、このように生活スタイルが変化するにつれて家族関係、家族構成が変化しつつある。

<sup>9</sup> モンゴル国立統計局、人口、住居調査、2000年度、2001年

<sup>10</sup> モンゴル政府、国連 UNDP、「ウランバートル市の貧困化、移住問題」調査報告書、2004年

## 家族構成

モンゴル社会の変動に伴い、人々の性格、知的財産、価値観が変化してきている。このような変化が家族関係にも影響を及ぼし、その表れが感じられるようになった。

調査対象者の66.8%が結婚していて、10%が離婚していた。20.3%が配偶者と死別、2.9%が独身であった(表 20)。

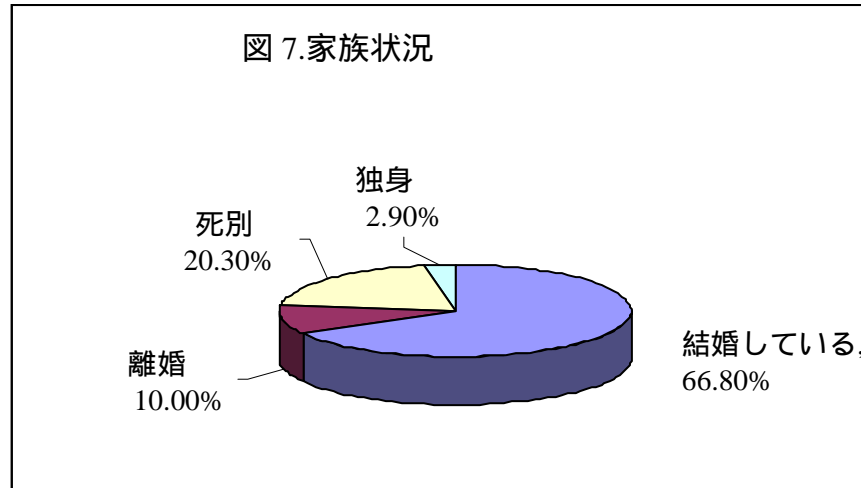


表 20、家族構成

家族構成	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
結婚している	93	112	2	207	66.8
離婚した	24	6	1	31	10.0
死別	55	4	4	63	20.3
独身	1	1	7	9	2.9
合計	173	123	14	310	100.0

調査対象者の結婚を聞いたところ、76%(234人)妻と、夫のどちらも初婚だった。

表21、結婚について

選択肢	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
妻、夫どちらも初婚	129	99	6	234	75.5
回答者の初婚、配偶者の2回目の結婚	9	9	0	18	5.8
回答者の2回目の結婚、配偶者の初婚	13	6	1	20	6.5
どちらも2回目の結婚	17	7	0	24	7.7
その他	5	2	7	14	4.5
合計	173	123	14	310	100.0

調査対象者の57.9%が90年代以前に、42.1%が90年代以降に結婚している。

表22、結婚した年

年	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
1940-1960	10	3	2	15	5.0
1960-1980	36	36	0	72	23.9
1980-1990	52	34	1	87	29.0
1990-2000	54	32	2	88	29.2
2000-2006	20	17	2	39	12.9
合計	172	122	7	301	100.0

### 教育状況

モンゴル国の識字率はきわめて高く、これは社会主義時代の人間開発分野における成果で、当時、モンゴルのすべての国民が基礎教育および 8 年制教育を受けることを法律で義務付けていたことと関連する。

しかし、現在の状況でモンゴルでは基礎教育を受けること自体よりは、受けた教育が個人の生活に与える影響、教育レベルを高めることの重要性が注目すべき課題となってきた。例えば、2006 年に政府が「福祉法」を提案し国会で可決された。この法律は、貧困者、社会的弱者である高齢者、障害者、子たくさんの母子世帯の生活と深く関連しているのであるが、この法律の実施に向けて貧困世帯を定義した際に、教育水準を重要な基準にしている。すなわち世帯主が高等教育を受けていれば貧困世帯とみなさないと明記しているのである。しかし、現実はこの定義とはかけ離れている。実際には、高等教育を受けたが生活が貧困な世帯は多数存在している。社会主義時代に獣医、畜産業関連の高等教育を受けた人々が市場経済化後にウランバートルで専門職に就くのが困難になったことは事実である。実際にこの人たちはかつて大学で高等教育を受けた人々なのである。

我々は本調査対象者にできるだけ貧困者 = 障害者家族を含めるように努力した。調査対象者の教育状況を見てみると、回答者の 3%、回答者の配偶者の 3% が高等教育を受けていることが上記の記述の証拠となる。

調査結果を見てみると、人々の専門職に対する認識が弱いことが判明した。これは彼らの生活状況で高等教育を受けることは困難であることを表している。彼らの収入は日常生活をかるうじて満たす程度である。

調査対象者の結果を見てみると、対象者の 70% が中学校、1.3% が教育を受けていない、12.6% が小学校、13.2% が専門学校、2.9% が大学を卒業している。回答者の配偶者の教育状況を見てみると、50% 中学校、8.4% が小学校、8.1% が専門学校、大学、0.3% が教育を受けていることが明らかになった（図 8）。

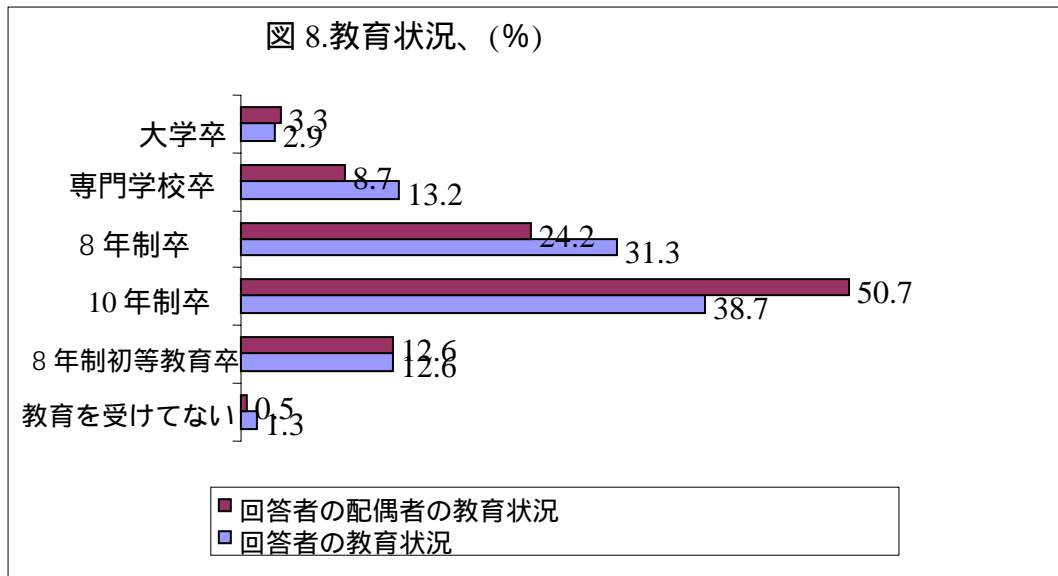


表 23. 回答者の教育状況

教育状況	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
教育を受けていない	3	0	1	4	1.3
8年制初等教育	21	14	4	39	12.6
8年制	62	55	3	120	38.7
10年制	55	39	3	97	31.3
専門学校卒	28	12	1	41	13.2
大学卒	4	3	2	9	2.9
合計	173	123	14	310	100.0

表 24. 回答者の配偶者の教育状況

教育状況	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
教育を受けていない	0	1	0	1	0.5
8年制初等教育	12	14	0	26	12.6
8年制	52	51	2	105	50.7
10年制	21	29	0	50	24.2
専門学校卒	6	12	0	18	8.7
大学卒	3	4	0	7	3.3
合計	94	111	2	207	100.0

市場経済移行後、労働市場に大きな変動が生じ、社会主義時代に無かった職業、サービス業が新たに導入された。こうした状況のなかで、人々が以前に習得した専門知識が通用しなくなり、市場経済期に適合する専門知識を新たに習得する必要性が生じている。最近、人々は短期専門コースを受けることが増加している。

調査対象者の40%が教育を受けていなくて、義務教育を受けていたか、卒業している。調査対象者男性の多くは運転免許を取得し、鉄筋溶接工などになり、女性は縫製、コック、店員、靴修理のコースを受けている。

専門学校を卒業した男性の中で内装デザイン、大工、トラック運転手、自動車修理、女性は建設現場、農業および食品衛生の分野が多い。

表 25.回答者の最終教育状況

	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
義務教育	72	51	5	128	41.3
専門コース	21	35	1	57	18.4
技術専門学校	32	23	2	57	18.4
特別専門学校	34	8	2	44	14.2
大学	5	4	2	11	3.5
その他	9	2	2	13	4.2
合計	173	123	14	310	100.0

表 26.回答者の配偶者の最終教育状況

最終教育	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
義務教育	39	52	0	91	44.0
専門コース	28	23	0	51	24.6
技術専門学校	13	15	1	29	14.0
特別専門学校	4	12	0	16	7.8
大学	2	6	1	9	4.3
その他	8	3	0	11	5.3
合計	94	111	2	207	100.0

## 労働状況

今日、多くの人々にとって生活をつなぐためになんらかの職に就くことが必要となっている。しかし、近年、失業者<sup>11</sup>が急増し、職を探しても見つからないために人々の生活水準が低下し、モンゴルでは「職を見つける希望を失った失業者」という新しい概念が登場している。

市場経済移行期において失業という概念が新しい現象として現れた。モンゴル国立統計局の2000年度人口、住居登録調査報告によると、労働人口の17.5%が失業者である。

政府は一定の時間が経過すれば、経済が上昇し失業率が自動的に低下し、職が増加すると見ている。これは経済理論的な観点から見れば、実現可能と見てよい。しかし、現実には失

<sup>11</sup> 1992年以降、モンゴルでは失業率を正式に登録し始めた。労働年齢の失業者、職を積極的に探している失業者をアイマグ、地区の労働局に登録されていれば、正式に失業者とみなす。ただし、統計データと現実の数字の間に大きな開きがある。その原因は、失業者が最初からあきらめて労働局に登録をしていないためである。

業がもたらす影響は深刻なものである。現在の失業問題は人々の能力を低下させ、人として生きる可能性、他人の尊敬を受け、自分を誇ることを無くしている。このことがさらに、家族関係を悪化さ、その関係を通じて子どもに影響を及ぼしている。

調査対象者の労働状況を見てみると、ほとんどの人が非公式<sup>12</sup>な分野の職についている。全国的にこの数字が126千人に上る。この分野に従事している人々の労働安全基準が不備で、社会福祉政策から取り残されることが多い。

貧困生活から抜け出し、収入源を確保するために職に就くことが重要である。

しかし、現在、職についている人々の多くはリスクの高い職についていることが、その人自身、家族を社会的弱者の立場に追い込む<sup>13</sup>要因となっている。

表 27 . 回答者の就労、労働状況

現在の職業	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
家事手伝い	15	6	0	21	6.7
子守り, 介護している	28	8	1	37	11.9
年金受給者, 障害者認定者	35	26	4	65	20.9
商売している	8	7	0	15	4.8
ゴミ拾い	11	5	0	16	5.2
建設現場	2	10	1	13	4.2
工場、会社	27	21	4	52	0.6
個人経営、サービス業	19	26	1	46	14.8
その他	3	3	1	7	2.6
失業者	25	11	2	38	12.3
合計	173	123	14	310	100.0

調査回答者の20%が年金受給者、障害者認定者である。18.6%が家事、子守、病人を介護している。これは調査回答者の大半123人が職に就いていないということである。

調査回答者の残りの60%のうち5%がゴミ拾いで生計を立てている。ゴミ拾いで生活している人々の多くは女性である。ゴミ拾いで生計を立てている人々は工場、会社に正式に就職している人々とほぼ同じである。

写真 3 Zurag 3

ソングノハイルハン区第3ホロー 「ウラン・チュルト」ごみ収集所

個人経営、サービスについて詳しく見てみよう。人々はタクシー経営、自動車修理、車洗い、電話サービス、牛乳、石炭売り、生活用品（ストーブ、煙突、家具）を作り、靴修理、子守（バービーシッター）、またはヘセグリーダー、グダムジリーダーをやっている。

<sup>12</sup> モンゴル国では農業、畜産業分野、国営ではない、1人から4人の従業員を継続的に雇っている小企業を非正式部門という。

<sup>13</sup> 本調査において「弱者」という概念を何らかの困難が生じた際に、立ち向かう能力を持たないという意味で使った。



工場労働者はじゅうたん工場、資材工場、繊維工場、レンガ工場、精肉工場で働いている。会社勤めの場合、警備員、教員、看護婦、介護者、水道局職員、軍隊関連職、電気修理師、トラック運転手、食品製造、こも包み、レストラン従業員、清掃員、水配布者などの職に就いている。占い師も何人がいた。

表 28. 回答者の配偶者の就労状況

現在の職業	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
家事手伝い	2	15	1	18	8.8
子守り, 介護している	2	18	0	20	9.6
年金受給者, 障害者認定者	11	11	0	22	10.7
商売している	2	7	0	9	4.3
ゴミ拾い	5	6	0	11	5.3
建設現場	9	3	0	12	5.7
工場、会社	27	26		52	25.1
個人経営、サービス業	20	10	0	30	14.6
その他	1	4	0	5	2.4
失業者	14	12	1	28	13.5
合計	93	112	2	207	100.0

調査回答者の 12.3%が、配偶者の 13.5%がまったく職についていない。職に就いている人々の 27%が現在の職に満足している。職に就いていない、あるいは現在の仕事に対して不満を抱いて別の仕事をしたいと考えるようになった原因は、年齢を制限すること、体が弱くて仕事についていけないことである。年齢制限が原因で仕事に就けない回答者の多くは 40 歳以上の人々であった。とくにサービス業では年齢のほか、容姿で仕事の条件を満たさないことが多い。

事例：44 歳、女性、5 人家族。子どもたちが成人した。2000 年にコックのコースを受けた。個人で食堂をやりたいと思っているが、原料が高くて、できていない。国营企業に就職したいと思っているが、年齢制限を越えていると理由で雇ってもらえない。いまは家に居る (A-3-9-138)

34 歳、母子家庭、7 人家族。自分の母、娘、息子、嫁、孫娘と一緒に住んでいる。1999 年に 27 歳のときに子どもたちの学校、生活を向上させる目的でウランバートルへ移住してきて第 3 ホローに定住した。結婚 7 年目に 2002 年に夫が死亡。今は食品市場で卵、ティッシュを売っている。2005 年に店員 食品管理の専門コースを受けた。これと関連の職に就きたいと思っているが、外見で断れる。(A-3-2-100)

表 29 . 回答者の失業、希望職につけない原因

主な原因	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
年齢制限	37	25	0	62	27.7
体が弱い	26	23	6	55	24.5
介護者、子守	18	4	0	22	9.8
専門無し	3	3	0	6	2.6

外見で断れる	1	1	0	2	0.9
身分証明書無し、移住手続きを行っていない	2	2	0	4	1.8
自分に合った仕事家が家の近くに見つからない	6	5	0	11	4.9
コネがない、夫がやきもちをやく	1	1	0	2	0.9
民間会社は保証がなく、低賃金	0	3	0	3	1.3
商売をする金がない、個人で商売をやっても利益がない	2	3	0	5	2.2
その他	28	21	3	52	23.2
合計	124	91	9	224	100.0

表 30、回答者の配偶者の職に就けない理由

	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
年齢制限	21	23	1	45	31.5
年齢制限	8	13	0	21	14.7
介護者、子守	1	12	0	13	9.1
自分に合った仕事家が家の近くに見つからない	4	6	0	10	6.7
専門無し	3	4	0	7	4.9
コネがない、夫がやきもちをやく民間会社は保証がなく、低賃金商売をする金がない、個人で商売をやっても利益がない	1	3	0	3	2.1
身分証明書無し、移住手続きを行っていない	2	0	0	2	1.4
その他	23	18	0	41	28.7
合計	63	79	1	143	100.0

市場経済移行後、多くの人々が定職についていない。特に、女性の割合が高く、回答者女性の74%が定職についていない。そして男性の67%も定職についていない。

表 31、市場経済移行後定職に就いたか否か

回答選択肢	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
はい	44	40	2	86	27.7
いいえ	129	83	12	224	72.3
合計	173	123	14	310	100.0

表 32. 市場経済移行後定職に就いたか否か（回答者の配偶者の場合）

	回答者	合計
--	-----	----

回答選択肢	妻	夫	合計	人数	割合
はい	30	33	0	64	30.9
いいえ	63	79	1	143	69.1
合計	93	112	1	207	100.0

## 世帯の生活状況、生計について

調査対象者の多くはインフラ整備が整っていない山の斜面にあるゲルに定住している。水道がない家庭が多く、彼らはゴミ収集、水道、トイレの排水の共同システムが整備されていない状況の中で、石炭を燃料に使い、風呂がない生活を続けている。電気がない世帯も少なくない。

家族の住居状態を見てみると、石炭・まきを燃やし、井戸から水を汲んでいる。調査対象地である第3ホローは、市の都市計画とは無関係に急激に拡大しているゲル地区である。

世帯の全支出の中で食料費が最も高いが、多くの世帯の場合、最低限の食糧需要を満たしていない。生活水準が低いことはその家族の中で子ども、高齢者、障害者、母子世帯に最も重くのしかかっていることが調査結果から明らかになった。

労働市場における課題の一つは低賃金である。人々は仕事についているが、貧困生活を送っている。政府は、最低賃金レベルを毎年改正<sup>14</sup>してきている。2007年度現在、最低賃金レベルを69,000 トゥグルグと定めた。この金額は家族員が多い家庭ではとうてい足りない金額である。

## 家庭収入

調査対象家族は生活のためにあらゆる形で金銭および非金銭収入を得ている。本調査では家族の定期的な金銭および非金銭収入の両面を明らかにすることにした。ただし、家族の非金銭的な収入を確定することは困難だった。その理由は、家族員の毎日、毎月の収入が不安定で金額も様々であることである。全体的に調査対象家族は世帯予算、収入、支出簿をつけることなく、これに対する知識もほとんど無かった。

調査対象家族の約60%が平均月収は90,000 トゥグルグ以上であった。

<sup>14</sup>政府は最低賃金を2000年に18,000 トゥグルグ、2001年に24,750 トゥグルグ、2002年に30,000 トゥグルグ、2004年に40,000 トゥグルグと定めた。

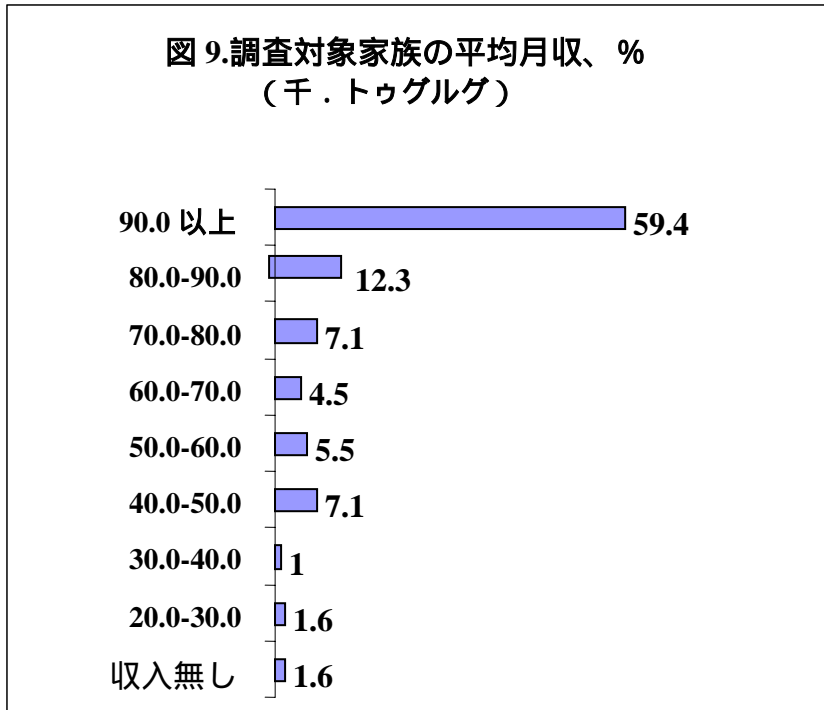
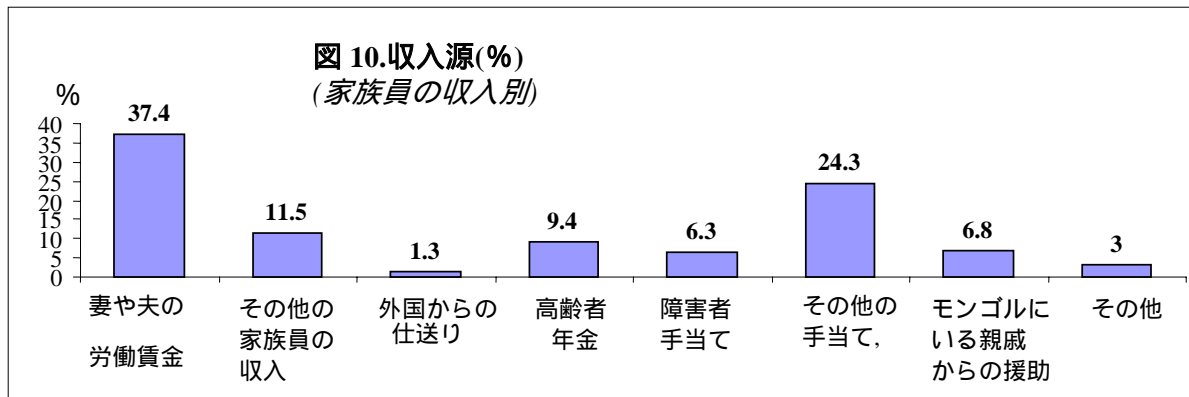


表 33 . 平均月収

収入 (千・トゥグル グ)	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
収入無し	4	0	1	5	1.6
20.0-30.0	0	4	1	5	1.6
30.0-40.0	3	0	0	3	1.0
40.0-50.0	14	7	1	22	7.1
50.0-60.0	12	4	1	17	5.5
60.0-70.0	6	8	0	14	4.5
70.0-80.0	11	11	0	22	7.1
80.0-90.0	22	15	1	38	12.3
90.0 以上	101	74	9	184	59.4
合計	173	123	14	310	100.0

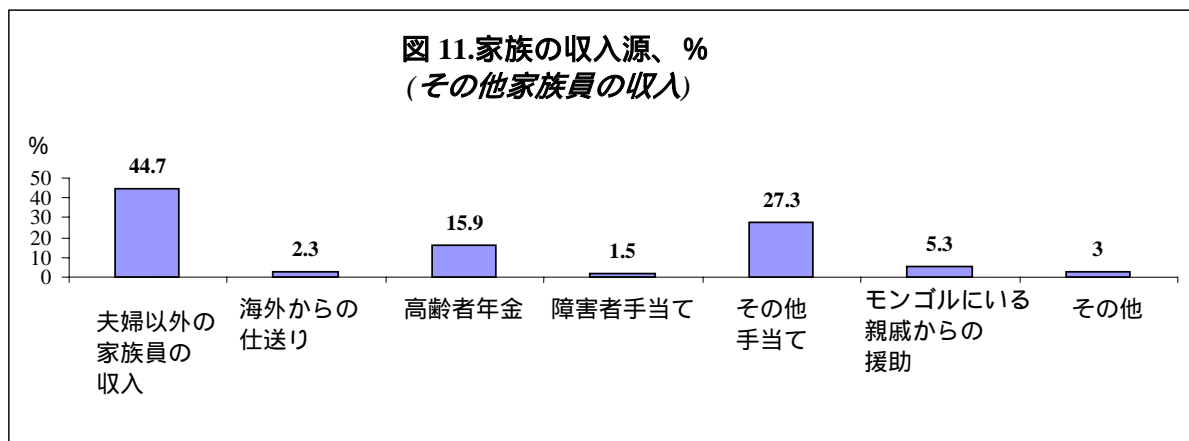
世帯収入について調査対象者の 37.4%が自分あるいは配偶者の賃金から得ていると答えている。



調査対象家族のうち 10 家族に海外の出稼ぎからの仕送りがあることが判明した。金額を見てみると、2 家族に 20.0 千トゥグルグこれは最も少ない方、3 家族に 20.0-30.0 千トゥグルグ、5 家族に 90.0 千トゥグルグとなる。10 家族を合わせると 1 ヶ月に合計 520.0 千トゥグルグになる。

高齢者年金、障害者手当以外の手当てが家族収入の 24.3%にあたる。これは基本的に児童手当である。2004 年の選挙後、政府は毎月各世帯に児童手当 3000 トゥグルグを支給することを決定したが、これは家族収入の一つの源になっている。

高齢者年金は平均 40.0-50.0 千トゥグルグである。



障害者を抱える家族の平均月収をヘセグ別に見てみると、障害者を(大人)を抱えながら金銭収入をまったく得ていない 2 家族があった。第 2ヘセグに障害者(大人)が 80 人登録されたのがその他のヘセグに比べると最も多い。

**表34.障害者を(大人)抱える家族の平均月収**

収入(金額)	ヘセグ				合計	
	第2ヘセグ	第9ヘセグ	第10ヘセグ	その他	数	%
無収入	0	1	1	0	2	1.5
20.0-30.0	1	0	0	1	2	1.5
30.0-40.0	1	0	1	0	2	1.5
40.0-50.0	2	3	4	0	9	6.6
50.0-60.0	2	2	1	1	6	4.3
60.0-70.0	2	1	4	0	7	5.1
70.0-80.0	3	2	3	0	8	5.8

80.0-90.0	8	2	4	0	14	10.2
90 以上	61	14	7	5	87	63.5
合計	80	25	25	7	137	100.0

表35.障害者（子ども）を抱える家族の平均月収

収入(金額)	ヘセグ				合計	
	第2ヘセグ	第9ヘセグ	第10ヘセグ	その他	数	%
40.0-50.0	1	0	2	1	4	7.8
50.0-60.0	2	2	5	0	9	17.6
60.0-70.0	1	0	2	0	3	5.8
70.0-80.0	0	5	0	0	5	9.9
80.0-90.0	1	0	1	0	2	4.
90 以上	13	5	9	1	28	54.9
合計	18	12	19	2	51	100.0

### 支出

支出はその家族の生活を金銭的に表したものと考えることができる。家族の支出を細かく計算することに無理があり、平均的に計算し分析した。その理由は、ほとんどの家族が家計簿をつける習慣が無いことである。

世帯収入が不安定のために収入の使い道もばらばらである。平均世帯支出は100.000トゥグルグを超える。そのうち約50%は食料費に当たる。こうした家族は栄養のある良質の食料品を買えることができないと(83.5%)答えている。

表 36.平均月支出

収入 (千・トゥグルグ)	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
40.0以下	1	3	0	4	1.3
40.0-60.0	17	10	2	29	9.3
60.0-80.0	22	16	0	38	12.3
80.0-100.0	33	20	1	54	17.4
100.0-120.0	33	27	3	63	20.3
120.0-140.0	24	10	2	36	11.6
140.0-160.0	11	11	2	24	7.7
160.0-180.0	5	7	2	14	4.5
180.0-200.0	10	7	1	18	5.8
200.0 以上	17	12	1	30	9.8
合計	173	123	14	310	100.0

世帯の食料品の供給、保障が失われる主な要因は貧困生活と見ることができよう。調査対象者のほとんどが収入の大部分を食料品に当てているにもかかわらず、良質な栄養のある食料品を使用していない。このことが家族の健康に悪い影響を与えるレベルに達していることに注目したい。栄養のある食料品を使えないことが原因で、病気が慢性化し、労働能力がどんどん失われていく危機に直面していることは重要である。

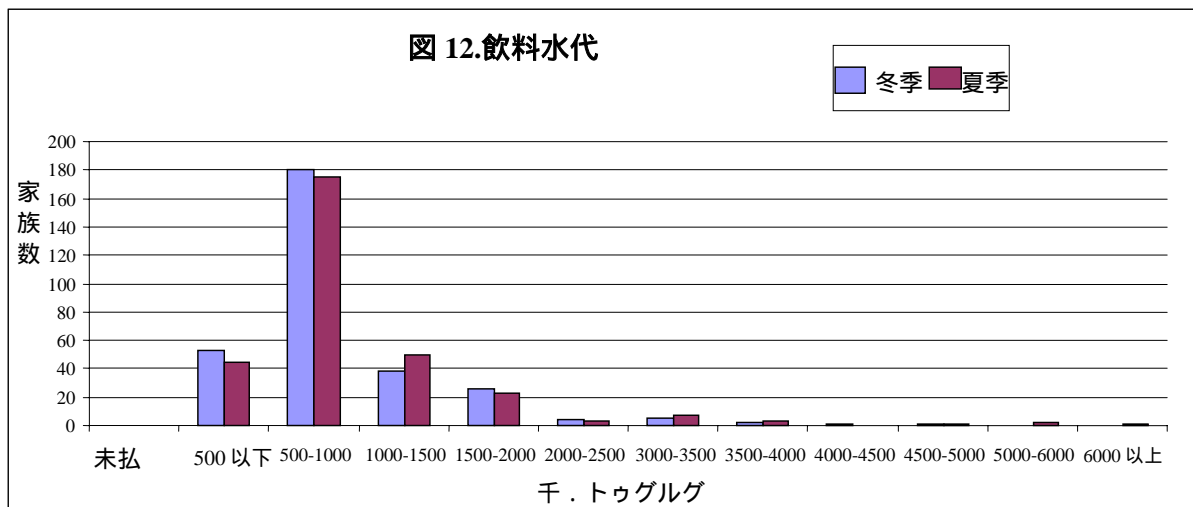
表 37.月支出のうち食料費

収入 (千.トゥグルグ)	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
20.0以下	3	3	0	6	1.9
20.0-30.0	6	6	2	14	4.5
30.0-40.0	27	16	1	44	14.2
40.0-50.0	32	19	1	52	16.8
50.0-60.0	23	20	5	48	15.5
60.0-70.0	29	20	0	49	15.8
70.0-80.0	15	13	1	29	9.3
80.0-90.0	15	7	1	23	7.4
90.0-100.0	4	6	1	11	3.6
100.0以上	19	13	2	34	11.0
合計	173	123	14	310	100.0

表38.栄養のある良質の食料品購入に当てている支出

	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
足りる	7	2	0	9	2.9
何とか足りる	25	15	2	42	13.6
ほとんど足りない	63	49	8	120	38.7
まったく足りない	78	57	4	139	44.8
合計	173	123	14	310	100.0

ゲル地区住民の日常生活にとって一番重要とされているのは飲料水、燃料、電気、ゴミ問題である。調査結果を見てみると、一般的に1ヶ月の飲料水代が冬季には700トゥグルグ、電気代は5000トゥグルグ、燃料代は30,000トゥグルグ、ゴミ収集代は1200トゥグルグである。夏季には、燃料代、電気代が冬季より安くなる傾向にある。



モンゴルにおける人間開発問題のなかで最も困難なのは飲料水の供給である。ゲル地区住民は飲料水を井戸および配給車により確保している。調査対象地である第3ホローには井戸

が3つ、水配給車が9台ある。調査が実際に実施された第2, 9, 10ヘセグには上記の井戸の6つの位置している。

調査結果によれば調査対象家族の平均1ヶ月の飲料水代は700トゥグルグである。これは1家族が1ヶ月に平均700L(一日におよそ22L)の水を使っているということになる。このうち、どのぐらいをどうやって使っているかというのは計算できない。現在、水10Lが10トゥグルグである。人々は健康で健全な環境の中に生活する権利を有するが、調査対象家族の多くは世界保健機構(WHO)が定めた一人当たりの最低水使用量に満たないことが、この問題の深刻さを表している。

ゲル地区の家族は、年間平均の暖房、料理調理に30キロワットのエネルギーを確保するために4トンの石炭、2.5トンの薪を使用しているという研究報告がある<sup>15</sup>。1世帯の燃料量は住居の規模、形、それから家族員数による。調査対象家族はほとんど障害者を抱えているので燃料量がゲル地区の一般家庭よりは多い。ゲル地区では燃料をすぐに使えるように準備をしなくてはならないので、その購入や労力が事前に必要になる。これは金銭的に表せないものである。調査結果を見てみると、燃料代として1ヶ月に平均30,000トゥグルグ使っている。現在に価格は石炭一袋1300トゥグルグ、まき1袋1000トゥグルグである。

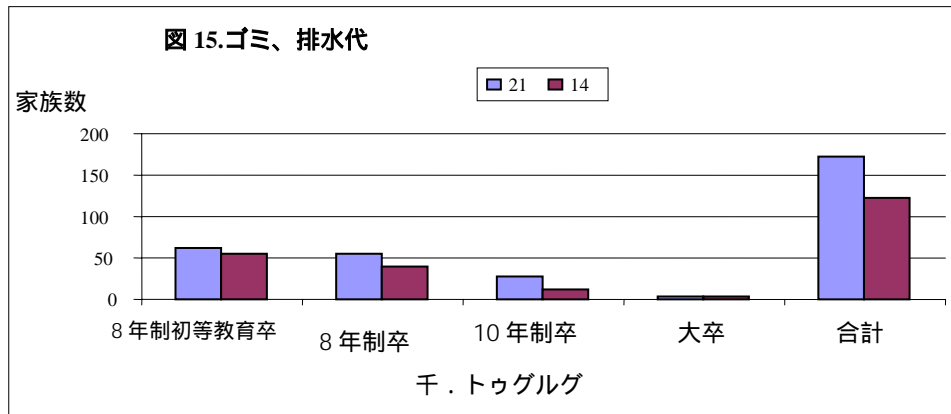
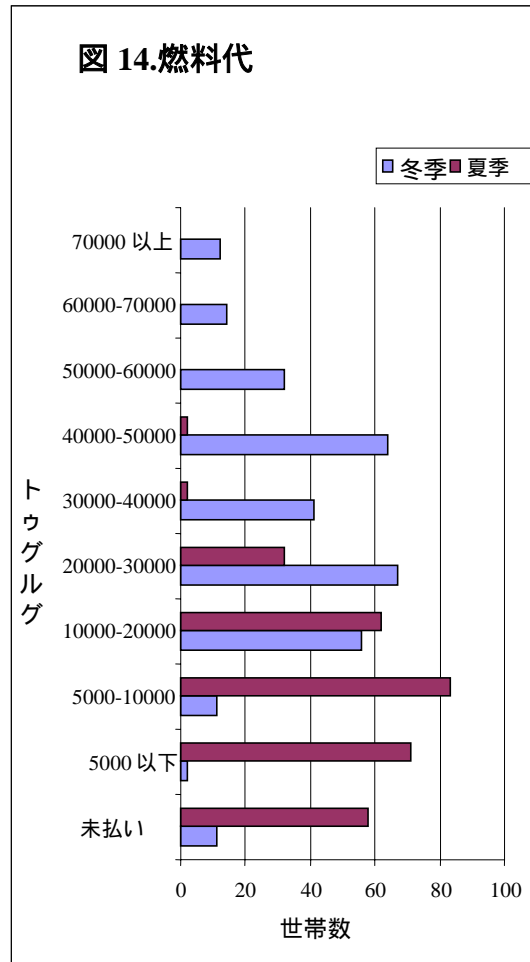
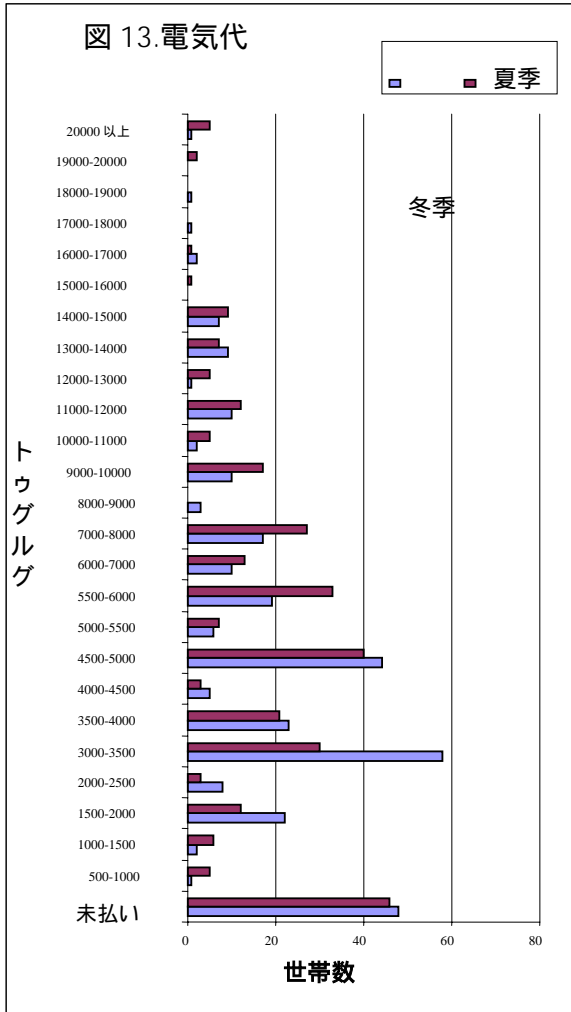
ウランバートル市の電力使用調査結果によると、1世帯あたりの電力使用量がゲル地区では139.3キロワットである<sup>16</sup>。現在、1キロワット電量は52トゥグルグである。調査対象世帯は1ヶ月に平均7000トゥグルグを電気代として支払っている。これは国の平均使用料とほぼ同じ結果である。

---

<sup>15</sup> モンゴル国における電力分野の持続的発展戦略(2003 - 2010年)への言及、USA ID, 2002年

<sup>16</sup> ウランバートル市電力使用調査、2004年





ほとんどの調査対象者がゴミ問題、排水問題の解決が重要であることを訴えている。対象家族の約 20%がゴミ、排水にお金を使っていなかった。使っている場合の 1 ヶ月のごみ収集、排水代は平均 1200 トゥグルグである。

事例：

9 人家族。夫婦、娘たち、息子、孫と一緒に暮らしている。息子 1 人、娘 5 人。孫娘が障害児。夫はトヴァイマグセンターに、妻がアルハンガイアイマグソムセンターに生まれた。妻の親、兄弟がウランバートルに住んでいるが、彼らから金銭的、物質的な援助は受けていない。妻は家にいて子どもたちの面倒を見ている。末っ子が今 8 歳。他の子どもはみんな

16歳以上。孫娘は今2歳。夫は公務員。妻が繊維工場で働きたいと思っているが、年齢制限があって、仕事が見つからない。今は44歳。10年制卒。これ以上高等教育を受けるチャンスは無かった。

月収は平均166,000トゥグルグ。支出は平均136,500トゥグルグ。そのうち45,000トゥグルグを食料費に当て、冬季には1ヶ月平均飲料水代600トゥグルグ、電気代14,500トゥグルグ、燃料代50,000トゥグルグ、ゴミ、排水代として1,200トゥグルグを使っている。ただし、今はゴミ収集代、電気代を未払いで借金28,000トゥグルグ。(A-3-2-48)

調査対象家族の多くは収入を支出が上回る。この収入を超える支出を親戚からの非金銭的援助によりまかなっている家族が多い。ただし、こうした家族の数はそう多くはない。収入を超える支出を多くの家族が借金することで解決している。しかし、本調査対象者の約半数(50%)が「今は借金がない」と答えたことは注目すべき結果であるが、実際には、調査対象者の役80%が、今の収入で栄養のある良質の食料品を購入することはできないと答えているのである。

一方、借金している家族の場合、約4割が100,000トゥグルグを超えている。借金額が一番多いのは2百万トゥグルグで、一番少ないのは600トゥグルグであった。

表 39 . 借金の状況

	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
借金無し	84	62	7	153	49.3
借金している	89	61	7	157	50.7
合計	173	123	14	310	100.0

表 40.借金額

トゥグリグ (千・TG)	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
20.0以下	15	8	3	26	16.6
20.0-30.0	9	6	0	15	9.5
30.0-40.0	2	5	1	8	5.1
40.0-50.0	11	3	0	14	8.9
50.0-60.0	6	4	0	10	3.2
60.0-70.0	6	5	0	11	3.6
70.0-80.0	2	2	0	4	2.5
80.0-90.0	1	2	0	3	1.9
90.0-100.0	1	1	0	2	1.3
100.0以上	36	25	3	64	40.8
合計	89	61	7	157	100.0

モンゴル国民の生活状況はどんなものだろうか？という質問をしてみよう。調査対象家族の収入状況を見てみると、ほとんどの家族は貧困生活を送っているといえよう。モンゴル政府が定めた最低生活基準<sup>17</sup>より少ない収入を得ている家庭は貧困家庭と見なされている。また

<sup>17</sup>最低生活基準を政府が毎年定めているが、2006年にはウランバートル市では.....トゥグルグである。

家族員一人当たりの収入額が 40%に満たない場合極貧困家庭、極貧困層と見なされている。そして、この家庭出身の子どもたちは貧困生活から向け出せなくて貧困のサイクルが広がり、貧困が世代から世代へ受け継がれている。

### トルゴイト地域住民の生活、参加

調査対象者の約 90%が第 3 ホローに生活することは心地よいと答えている。

#### 写真 4 Zurag4 第 3 ホローのゲル集落

第 3 ホローに 3 年以上居住している回答者に「3 年前と比べて第 3 ホローの生活環境は銅変わったか」という質問を聞いてみたが、調査対象者 241 人（78%）が第 3 ホローに 3 年以上居住している。このうち約 68%の人がここ 3 年間で生活環境は「良くなった」と答えている。これは、最近 3 年間にこのホロー住民が地域の生活環境の改善や、住民同士の相互援助に積極的に取り組んできた結果である。

表 41.第 3 ホローでの生活状況（他のホローと比較して）

選択肢	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
一時的には良い	8	6	0	14	4.6
心地よい	157	106	13	276	89.0
そんなに良くない	8	10	1	19	6.1
生活するのが困難	0	1	0	1	0.3
合計	173	123	14	310	100.0

表 42. 第 3 ホローでの居住年数

年	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
1年以下	6	2	0	8	2.6
1年から2年	16	9	2	27	8.7
2年から3年	15	17	2	34	11.0
3年から6年	50	41	2	93	30.0
6年から9年	23	25	2	50	16.1
9年から12年	14	8	1	23	7.4
12年から16年	6	1	0	7	2.3
16年以上	43	20	5	68	21.9
合計	173	123	14	310	100.0

表 43.生活環境の変化（3 年前と比較して）

選択肢	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合

非常良くなった	28	16	1	45	18.7
良くなった	95	60	8	163	67.7
悪化した	9	16	1	26	10.8
非常に悪化した	1	1	0	2	0.8
特に変わっていない	3	2	0	5	2.0
合計	136	95	10	241	100.0

他のホローと比較すると、第3ホローの活動がどんなレベルにあるかをいくつかのカテゴリで分析し、まとめた。以下、全回答者の回答を割合の高い方から並べた。

1. 88%近隣の関係が良い
2. 84.5%安全で、犯罪が少ない
3. 82%ホローの職員が住民と近い
4. 75%清掃活動がよく行われる
5. 74.2%色々な活動が組織されている
6. 62%障害者、子ども、高齢者をよく手伝う

近年、ホロー住民の活動が活発化してきている。今は、ホロー多くの住民がホローの発展に自分たちの積極性、参加が重要だと認識するようになった。調査対象者の3人のうち1人が第3ホローの発展は向上していると評価している。

表 44.ホローの活動に対する住民の評価

活動	選択肢			
	はい	%	いいえ	%
清掃活動がよく行われる	231	74.5	79	25.5
安全で犯罪が少ない	262	84.5	48	15.5
近隣関係が良い	272	87.7	38	12.3
障害者、高齢者、子どもをよく助けている(手伝っている)	192	61.9	118	38.1
様々な活動が行われている	230	74.2	80	25.8
ホローの職員が親切で、住民に近い存在	254	81.9	56	18.1

現在モンゴルでは、人権問題、社会福祉基礎サービスの供給が不十分であることを政府が認めている。これに対して住民自身による新しい動きも見られ始めている。確かに全体としてみれば、この状況を脱出する出口は人々の手にあるにもかかわらず、彼らは現状を批判し、あるいは誰かにその責任を押し付け、将来を信じられなくなり、さらに自分自身の活動結果を信じられなくなっていることは事実である。しかし、こうした状況をどうすれば乗り越えられるか?この問題を住民がどのように理解し、受け止めているかを調査結果は示唆しているように思われる(表 45)。

表45.ホローの活動における住民参加度

住民の参加	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
積極的	58	43	3	104	33.5
どちらかという積極的	65	49	5	119	38.4
どちらかという非積極的	27	18	2	47	15.2

参加しない	23	13	4	40	12.9
合計	173	123	14	310	100.0

表46.このホローに今後生活するかどうか

選択肢	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
可能であれば長く住みたい	164	118	14	296	95.5
長く住みたくない	9	5	0	14	4.5
合計	173	123	14	310	100.0

ホロー住民にとって、今後どんな問題を解決する必要があるかという質問に対して、調査対象者のうち 64.5%がゴミ清掃活動をさらに改善する、13.5%が飲酒を減らす、7.4%が生活を立て直し、貧困生活から抜け出す、6.7%が近隣関係を良くし、互いに助け合うと回答している。ホロー住民が良質で、栄養のある食料品を購入できない状況にあるにもかかわらず、生活環境を重視していることは高く評価すべきことである。

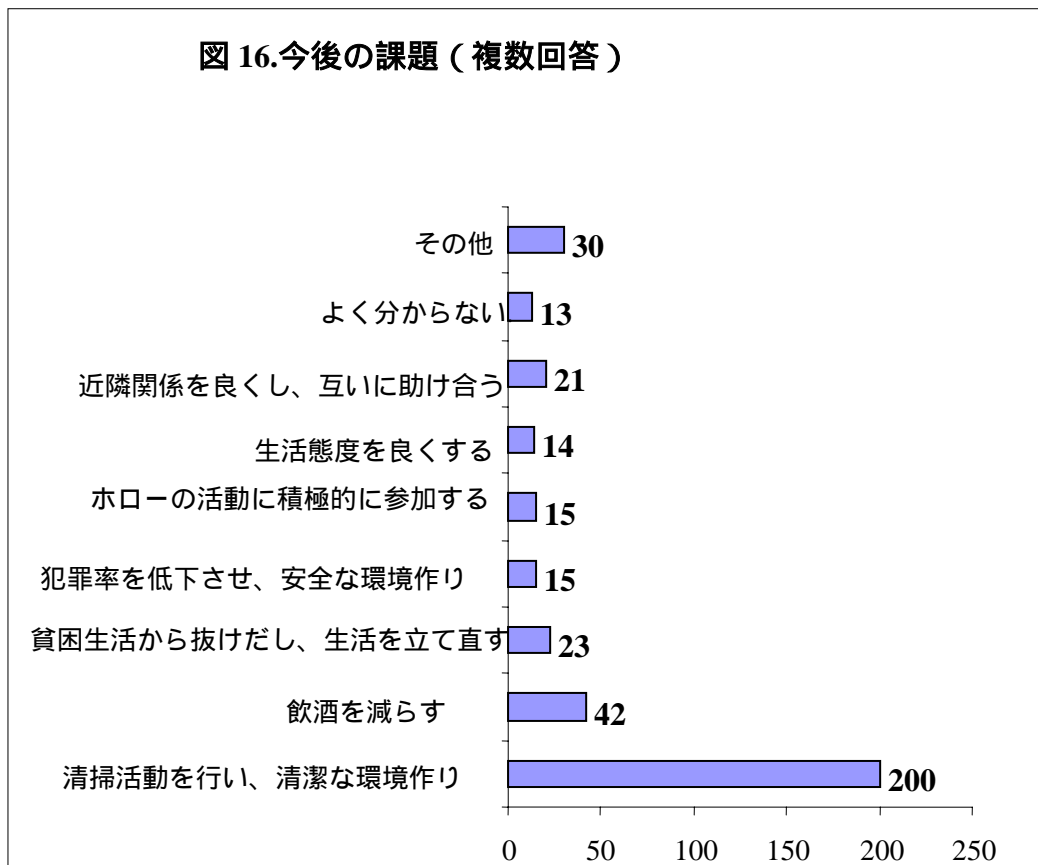


表 47.今後の課題

選択肢	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
清掃活動を行い、清潔な環境作り	109	83	8	200	
飲酒を減らす	25	17	14	42	
貧困生活から抜けだし、生活を立て直す	10	12	1	23	
犯罪率を低下させ、安全な環境作り	8	6	1	15	

ホローの活動に積極的に参加する	8	7	0	15	
生活態度を良くする	10	3	1	14	
近隣関係を良くし、互いに助け合う	15	5	1	21	
よく分からない	9	4	0	13	
その他	16	10	4	30	

ホロー住民のホローの活動、発展に関する意見の大多数をゴミ問題が占めている。

今後のホロー職員に期待すること：

- 住民との距離を締め、丁寧な態度で接する
- ゴミ収集所の清掃、ゴミの収集を徹底化する
- マイクロバスのサービスを良くし、バス停と居住地との距離を近くにする
- 情報を速やかに提供する
- 警察のサービスを良くし、住民に近づける
- 住民の生活状況の改善
- ホローの環境作り（街頭、道路修正、橋作り、グダムジを分かりやすくするなど）

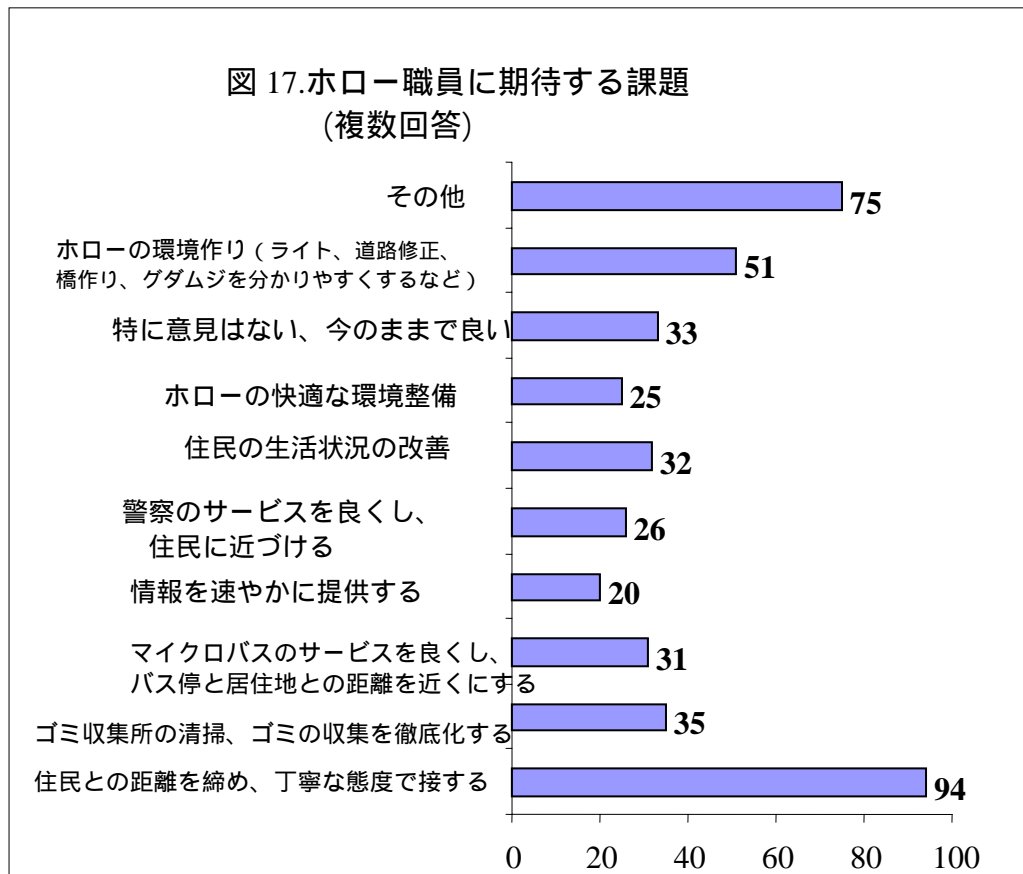


表 48.ホロー職員に期待する活動

選択肢	回答者			合計	
	妻	夫	合計	人数	割合
住民との距離を締め、丁寧な態度で接する	48	36	10	94	30.3
ゴミ収集所の清掃、ゴミの収集を徹底	25	9	1	35	11.3

化する					
マイクロバスのサービスを良くし、バス停と居住地との距離を近くにする	19	11	1	31	10.0
情報の速やかな提供	10	9	1	20	6.4
警察のサービスを良くし、住民に近づける、警察官の人数を増やす	14	12	0	26	8.3
住民の生活状況の改善	17	14	1	32	10.3
ホローの環境作り（ライト、道路修正、橋作り、グダムジを分かりやすくするなど）51人がこの問題を取上げた	42	29	5	76	24.4
特になし、いまのままでよい	20	13	0	33	10.6
その他	42	31	2	75	24.0

回答を見てみると、ホロー職員の態度、住民と丁寧に関わることが最もたくさんの意見を述べている。

ホロー職員に期待する活動について事例を挙げて見てみよう。

- 正式に登録住民となり、子どもたちを学校教育を受けさせたい。(A-3-10-234)
- 電気問題を解決して欲しい。約2年間電気無しで生活している(A-3-2-7)
- 野良犬の除去。(A-3-2-22)
- 子どもたちのために遊び場(公園)を作る。
- (A-3-2-58)
- 住民の生活状況調査を定期的に行う。(A-3-9-156)
- 住民の生活に対してアドバイスを与える。(A-3-9-157)
- ウランチュルートごみ収集所の煙を無くす。(A-3-9-196)
- 会議、集会に関する情報を提供する。(A-3-10-221)
- 母子世帯、障害者世帯への援助、手助け。(A-3-10-238)

### 3.結果、提言

#### 結果

市場経済移行期の住民の貧困、その原因を明らかにすることを目指した A 調査は、ソングノハイルハン地区の第3ホローの310家族(2910人)が対象となった。

調査対象310家族のうち、回答者は妻が55.8%、夫が39.7%、家族の誰かが4.5%であった。調査対象者の一番若いのは21歳、一番年上は86歳、全回答者の58%が31歳から50歳であった。家族、世帯、住民の生活の貧困を確定するために家族構成は重要なポイントの一つである。この意味において、我々は調査対象者の家族構成を詳しく分析してみた。

子どもが親と離れて生活している35家族があった。その子ども数は44人に上る。障害者を抱える家族を調べてみたが、調査対象家族の44.2%が障害者を、16.5%が障害児を抱えている。1家族が障害者2人を抱えているケースもあった。

A調査対象者の8.4%(26人)がウランバートル市中心部に、9.4%(60人)がウランバートル市郊外のゲル地区に72.2%(224人)がウランバートル市以外の地方都市、アイマグ出身者であった。このことから、ほとんどの調査対象者が地方、アイマグ出身者であることが分かる。そのうち約60%がソムセンター出身者である。

調査対象者の約70%が8年制、10年制教育を受け、1.3%が教育を受けていない、12.6%が8年制初等教育、13.2%が特別専門学校、2.9%が大卒であった。回答者の配偶者の教育レベ

ルを見てみると、50%が8年制、10年制教育、8.4%が年制初等教育、8.1%が特別専門学校、大学卒、0.3%が教育を受けていなかった。

調査回答者のうち約20%が障害手当てを受給者である。18.6%はうちにて子どもの面倒を見たり、病人を介護したりしている。このことから回答者に内123人が仕事に就いていないことを表している。

回答者の残りの約60%の人々がゴミを拾い、生活をつないでいる、こうした人々の多くは女性である。ゴミ拾いで生計を立てている人の数は、工場で働いている、あるいは会社勤めの人々とほぼ同じである。何とか仕事に就いている人々の27%が今の仕事について満足している。仕事に就けない、今の仕事に対して満足していないため他の仕事をしたいと思っている主な原因は年齢制限、外見、健康障害にあった。

調査対象者の収入を見てみよう。回答者のうち37.4%が収入は自分自身、配偶者の賃金からなっていると答えている。平均月収は90.0トゥグルグ以上である。こうした家族の収入は不安定でこの分配も様々である。家族の平均支出は1ヶ月に100.000トゥグルグを上回る。そのうち、約50%が食料費に当てられている。このことから、栄養のある良質の食料品の購入は困難で、足りていない(83.5%)ということがわかる。

ゲル地区住民の日常生活費の中に飲料水代、燃料代、電気代、ゴミ収集代が重要である。調査結果を見てみると、1ヶ月の平均支出は飲料水代が700トゥグルグ、電気代が5000トゥグルグ、燃料代が30.000トゥグルグ、ごみ収集、排水代が1200トゥグルグである。夏季には燃料代、電気代が冬より少なく済む。

調査対象者の約90%が第3ホローでの生活が心地よいと答えている。3年間以上第3ホローに居住している家族に「3年前と比較して今はホローの活動に変化が現れたか」という質問を聞いたところ68%が「どちらかというとなってきた」と答えている。近年、第3ホロー住民の参加が活発化してきている。現在、ホローの発展には住民自身の積極性、参加が重要であることを理解し、認識するようになった。調査対象者3人に一人が第3ホローの発展には良い兆しがあると見てホローの活動を評価している。このことからホローの発展は住民にとってよい影響を与えているということを示している。

今後の住民およびホローの活動、発展に対する意見の中でホローの快適な環境作り、ゴミ問題が最も重要なポイントとなっている。複数回答の中でホロー職員の態度、住民との接し方を良くしたいという意見が最も多かった。

## 提言

現在、人々の生活様式が常に変化し、それに伴って家族関係や家族構成が変化し続けている。都心部へ向かう移住プロセスを経済面からではなく、人々の生活環境の変化、それに伴う家族構成、関係にどのような影響を与えているかということの詳細を研究する必要がある。

住民が上からの援助をただ待つのではなく、自分自身で社会活動に積極的に参加することで自分自身を成長させ、それが、さらに貧困生活から脱出できるための第一歩となることをここで述べたい。個人、世帯、家族、グループの権限を増大させ、自分自身の生活、ポテンシャルを管理、指導するチャンスを与えることは一番適切な方法であるように思われる。このために、住民の必要性に基づいた政策を策定し、住民参加の活動を計画するための指導方法を導入すべき時期に来ている。



貧困は社会的弱者とくに障害者に重く押し掛かっていることが調査結果から明らかになった。今後、障害者であるゆえに貧困化している、あるいは貧困であるがゆえに障害者となっているということをさらに詳しく研究する必要がある。そうして、こうした相互連関をもつ社会問題に対して、諸政策や諸活動を関連させることは、貧困化や障害者問題を総合的にかつ的確に遂行するために重要であることを、特別に重視する必要がある。

障害者政策、プログラムを、特に障害者を抱える貧困家庭、極貧困家庭に向けることが重要になってきている。その原因は、こうした家族が急激に増加し、生活が困窮していること、それがまた新たな障害者家族をうみだしているからである。

地方行政機関の計画には障害者の生活向上、食料品、健康、非公式教育活動を反映させ、予算拠出を決定することが重要な課題となっている。

#### 参考文献

- ソンギノハイルハン地区の第3ホロー住民の「我々のホロー私たちの家」集会の資料、2005年。
- ソンギノハイルハン地区第3ホロー「住民ニュース」、2006年。
- 障害者福祉法、モンゴル国、2005年。
- モンゴル国立統計局、2000年度人口、住居登録結果、2000年。
- 国際労働機関、UNICEF、世界保健機構、障害者リハビリ、平等なチャンス提供、貧困緩和、社会復帰戦略、2004年。
- 保険社会福祉省（現、労働福祉省）、モンゴル国立大学社会学部「障害者の社会需要」調査報告書、1999年。
- AIFO イタリア NGO「障害者の法的環境整備の充実化を図る」プロジェクト、アンケート調査結果、2005年。
- モンゴル政府、UNDP「ウランバートル市における貧困化、移住問題」調査報告書、2004年。
- USAID、「モンゴル国における電力分野の持続的発展戦略(2003-2010年)への提言」2002年。
- ウランバートル市電力受給者、調査報告書、2004年。

付属資料。

A 調査票（基礎調査票）

対象者番号 A3 -	主な回答者：妻 夫 その他
調査員名	障害者・障害児 有 無（まるをつける）
第 セツェック・第 通り・ハシャー 住所不明	B 調査の承諾 有 無（最後に聞く） はい いいえ （有りの場合回答者名） 障害種類に関する記述：
ハシャー内世帯数： 世帯内家族数：	承諾者名：

あなたの家族についてうかがいます。

問1 このゲルに同居されている人を年齢順に教えてください。（あなたとの関係で記入してください）

また、障害者がいれば、その人の番号に をつけてください。

あなた	性別	年齢	才	性別	年齢	才
あなたの配偶者	性別	年齢	才	性別	年齢	才
	性別	年齢	才	性別	年齢	才
	性別	年齢	才	性別	年齢	才
	性別	年齢	才	性別	年齢	才

問2 同居されていないあなたの子どもは何人ですか。

1、いない 2、1人 3、2人 4、3人 5、4人以上

有の場合何人、どこに

問3 あなたと配偶者はどこで生まれましたか。

あなた

1、UB 市内（中心地） 2、UB 市郊外ゲル地区  
3、トブ県（県センター ソムセンター 遊牧地域）  
4、その他の県（県センター、ソムセンター 遊牧地域）

あなたの配偶者

1、UB 市内（中心地） 2、UB 市郊外ゲル地区  
3、トブ県（県センター ソムセンター 遊牧地域）  
4、その他の県（県センター、ソムセンター 遊牧地域）

問4 あなたの親ときょうだいは UB 市内に住んでいますか。

1、どちらもいる 2、親はいるがきょうだいはいない 3、きょうだいはいるが親はいない。

4、親もきょうだいもいない

問5 そのうち、あなたの家族にお金や物を日常に援助してくれる人はいますか。

1、いない 2、親のみ 3、きょうだいのみ 4、親・きょうだいとも

あなたのこれまでのことをおうかがいします。

問6 あなたが第3ホローに住むようになったのはいつからですか。

- 1、うまれてずっと      2、UB 市内から移住（地区名          ホロー          ）  
 3、UB 市外から移住（県名                                  ）

問7（問6で2，3と答えた方に）移住してきたのは何年で何歳の時でしたか。  
 （          年、          才）

問8（問6で2，3と答えた方に）移住してきた主な理由は何ですか。  
 （主な理由：                                                                  ）

問9 婚姻関係について伺います。1、結婚している          2、離婚した          3、死別した

B.あなた夫婦は次のどれに該当しますか。（死別、離婚の場合は死別前の相手で答えてください）

- 1、夫婦とも初婚      2、私は初婚で相手は再婚      3、私は再婚で相手は初婚  
 4、両方とも再婚      5、離別したまま

問10 あなた夫婦は何年に結婚されましたか（死別・離別の場合は最後の相手との結婚）

**仕事と収入についてうかがいます。**

問11 あなたと配偶者はいまどんな仕事をされていますか。（働いていない場合は「なし」と記入）

あなた（                                                  ）

あなたの配偶者（                                                  ）

問12（働いていない場合のみ、ただし生活のために何かと仕事をしている。）働いていない主な理由は何ですか。

あなた（                                                  ）

配偶者（                                                  ）

問13 あなたと配偶者の最終学歴を教えてください。

あなた（          卒業）          配偶者（          卒業）

問14 市場経済になってから今まで、あなたと配偶者は安定した仕事についたことはありますか。

あなた      1、ある          2、ない

あなたの配偶者      1、ある          2、ない

問15 あなたの家族の月平均の収入はいくら位になりますか。

- 1、なし      2、2万ツグルク未満      3、2万～3万ツグルク未満      4、3万～4万ツグルク未満  
 5、4万～5万ツグルク未満      6、5万～6万ツグルク未満      7、6万～7万ツグルク未満  
 8、7万～8万ツグルク未満      9、8万～9万ツグルク未満  
 10、9万ツグルク以上

問16 その月収の内訳を教えてください。（単位はツグルク、ない場合は0と記入）

あなたの収入（                          ツグルク）      配偶者の収入（                          ）      外国の出稼ぎからの仕送り      他の家族員の収入（                          ）      高齢者年金（                          ）  
 障害者年金（                          ）      他の公的援助金（                          ）      他の親族からの仕送り（                          ）      その他（詳細                          ）

**支出についてうかがいます。**

問17 家族の支出は月いくらですか。問15の額で答えてください。（          番）

問18 そのうち食費は月どのくらいかかりますか。問15の額で答えてください。（          番）

問19 その食費で家族の栄養は足りていますか。

- 1、足りている      2、何とか足りている      3、あまり足りていない      4、足りていない

問20 水・電気・燃料で月いくらかかりますか。

	水	電気	燃料	ゴミ
--	---	----	----	----

冬期				
夏期				

問2 1 あなたの家族は借金がありますか。  
 1、ない 2、ある(その合計額 ツゲルク)

この地域での生活についてうかがいます。

問2 2 あなたの家族がこのホローに住んで何年になりますか。  
 1、1年未満 2、1～2年未満 3、2～3年未満 4、3年～6年未満  
 5、6～9年 6、9～12年未満 7、12～16年未満 8、16年以上

問2 3 このホローは他のホローに比べて住みやすいと思えますか。  
 1住みやすい 2、どちらかといえば住みやすい 3、どちらかといえば住みにくい  
 4、住みにくい

問2 4 (3年以上住んでいる人のみ)3年ほど前と比べてこのホローは良くなりましたか、悪くなりましたか。  
 1、良くなった 2どちらかといえばよくなった 3どちらかといえば悪くなった  
 4、悪くなった。

問2 5 他のホローに比べ、このホローについて次の項目についてどう思いますか。  
 清掃がよくできている方だ。 1、そう思う 2、そうは思わない  
 第3ホローは治安がよく、犯罪が少ない 1、そう思う 2、そうは思わない  
 隣近所の関係が良い方だ。 1、そう思う 2、そうは思わない  
 障害者や老人を助け合っている方だ。 1、そう思う 2、そうは思わない  
 いろいろな行事が活発な方だ。 1、そう思う 2、そうは思わない  
 ホローの役所が身近に感じられる方だ。 1、そう思う 2、そうは思わない

問2 6 あなたの家族はホローの行事や集会に積極的ですか、消極的ですか。  
 1、積極的だ 2、どちらかといえば積極的だ 3、どちらかといえば消極的だ  
 4、消極的だ

問2 7 あなたはここにできれば長く住みたいですか。  
 1、できれば長く住みたい 2、できれば長く住みたくない

問2 8 あなたがこのホロー住民が今後もっと力を入れるべきだと思うことはどんなことですか。  
 ( )

問2 9 なたがホローの役所に最も力を入れてほしいことはどんなことですか。  
 ( )

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

**Nuur**  
 モンゴルの障害者とその家族に関する実証的研究

A 調査報告書

モンゴル研究グループ

第3ホロー議会  
 第3ホロー役所

Gender center for Sustainable Development

トルゴイト第3ホロー住民フォーラム  
モンゴル国立教育大学ソーシャルワーク学科

Hoid havtas geriin tailbar

第3ホローで活動しているジェンダーセンターの「公衆衛生教育センター」